

服した(なぜといつて、くだらない希臘の俳優は羅馬に打ち勝ち、そして無邪気な人々が口にするのを常としてゐる如く、希臘の文化に打ち勝たなかつた……)。しかし乍ら私が恐れたところのもの、若し欲するならば我々が今日既に捕捉するところのものは、我々近代人が全く同じ途上にあるといふことである。そして如何なる程度まで人間が或る役割を演ずるか、如何程まで彼が俳優であり得るかを彼が発見し始める度毎に、彼は俳優になる……それと共に、より固定的な、より制限された時代に於ては成長し得ないやうな、一の新らしき人間の Foe(或る地方または時代の植物全體)及び Friend(或る地方または時代の動物全體)が起つて来る。或は「下に」残される——汚辱の呪咀や猜疑の下に。それと共にいつも歴史の最も興味ある最も狂暴な時代が起つて来る。そこでは「俳優」が、あらゆる種類の俳優がほんとうの君主等である。丁度それによつて他の種属の人間がいよいよ深く傷害され、遂に不可能にされる——とりわけ、大なる「建築師」が、今建造力が癱痺する。遠い未來の爲めに計畫をたてるどころの勇氣が沮喪する。組織的天才が缺乏し始める。誰が今、その完成の爲めに、數千年の間計畫せねばならなかつた事業に着手することを敢てするか？ 人がよつてもつて計畫したり、約束したり、計畫のうちに將來を豫定したり、その計畫を犠牲にしたりすることの出来る(人間が一の大なる建物に於ける一の石である——その爲めに彼等は先づしつかりしてゐなければならず、「石」で

なければならぬ——限りに於てのみ、價值を有し、意義を有するといふ具合に)やうな、あの根本的信仰が死滅する……特に、俳優で——ない！ 要するに——ああ、これは尙ほかなり久しく黙守されてゐるであらう！ これから後もはや建造されない、もはや建築され得ないところのものは、古い言葉遣ひに於ける一の社會である。この建造物を建造するために、あらゆるものが、特に材料が缺乏してゐる。我々すべてはもはや一の社會に對する材料でない。これは時宜に適したる一の眞實である！ その間に尙ほ、今日の最も近視眼的な、恐らくは最も正直な、兎に角最も騒々しい種属の人間が、我々の社會主義者諸君が、殆んど正反對なことを信じたり、希望したり、夢想したり、特に叫んだり書いたりしてゐるのは、私にまでどうでもいいことのやうに思はれる。げに彼等の將來の合言葉なる、『自由な社會』はすでに凡ゆる卓や壁の上に讀まれてゐる。自由なる社會か？ さうだ！ さうだ！ しかし乍ら紳士等よ、諸君はそれが何から建造されるかを知つてゐるか？ 木造の鐵から！ 有名な木造の鐵から！ そして木造の……からでさへもなく……

三五七

『獨逸的とは何であるか？』と云ふ古く問題。——獨逸人の頭腦が御禮をいはれるところの、哲學的

思想のほんとうの所得といふものを、單獨に計量して見やう。それらのものは何等かの許されたる意味に於て、あの種族全體にも名譽になるやうに計量さるべきものであるか？ 我々はいひ得るか？  
 —それらのものは同時に『獨逸魂』の所作、少くともその徴候であると——我々がプラトオの觀念狂を、彼の殆んど宗教的な形式狂なぞを、同時に『希臘魂』の出來事並びに證據として考へるに慣れてゐるやうな意味合に於て。或は正反對のことが眞實であつたか？ それらのものは、例へば、デアテのよき良心をもつた異教主義がありし如く、丁度左様に個性的なものであり、あの種族の精神から左様に甚だしく除外例をなしてゐたか？ 或はビスマルクのよき良心をもつたマキヤベリ主義が、彼の所謂『實際政事』が獨逸人の間に於ける如く？ 我々の哲學者等は事に依つたらば、そののみならず『獨逸魂』の需要にすらも反對したか？ 要するに、獨逸の哲學者等は實際、哲學的獨逸人であつたか？ 私は三の場合を想ひ浮べる。第一にはライプニッツのあの比類なき洞察である。それでもつて彼は、ただにデカルトを凌駕したのみならず、また彼のときまで哲理を述べてゐたすべての人々をも凌駕したのである。曰く、意識は表象の一個發事に過ぎず、その必然な、本質的な屬性でない。したがつて、我々は我々が意識と名づくるところのものは、我々の精神的並びに心靈的世界の一體態を構成するに止まり、その世界そのものとは大に異つてゐると。今日尙ほその底を汲み干されないので

るかうした思想に於て、何等かの獨逸的なものがあるか？ 一人の拉丁人が容易くかうした外觀の顛倒にまづき倒れないであらうと、推定すべき理由があるか？ なぜといつてそれは一の顛倒であるから。次に我々は、カントが『因果關係』といふ概念に書き添へたところの、彼の巨大なる疑問記號を想ひ浮べて見よう。彼はヒ・ウムの如くその正當なることを悉く疑つてしまつたのでない。彼はむしろ、この概念の折々意義を有すべき領域に、用心深く限界を劃し始めた（我々は今尙ほこの限界を劃することに仕事を終へてゐないのである）。第三に我々は、種屬概念は相互から發展するといふことをヘゲルが教へるべく敢へてしたとき、あらゆる論理的習慣及び惡習慣の間を直往邁進したところの彼のあの驚くべき落想をとつて考へて見よう。あの命題でもつて歐羅巴に於ける思想家等は、最終の偉大なる科學的運動に、デアキン主義に準備をされた。なぜといつてヘゲル無しには如何なるデアキンも無かつたであらうから。『發展』といふ截然たる概念を始めて科學へ持ち込んだところの、このヘゲル式革新のうちに、何等かの獨逸的なものがあるか？ 然り、如何なる疑ひもなく、すべての三の場合に於て我々は、我々自身の何物かが『發見され』、洞見されるのを感ずる。そしてそれに對して有難く思ひ、且つ同時に驚かされてゐる。かうした三の命題の各は獨逸的自已認識の、自己經驗の、自己理解の、沈思的な一片である。『我々の内面世界はずつとより豊富で、より廣大でより隠れ

てゐる』と我々は、ライブニッツと共に感ずる。獨逸人として我々は、カントと共に自然科学的認識の最終の有効性を、また一般に因果的に認識されるすべてのものを疑ふ。認識すべきものはさういふものとして我々にまで今、より少き價值をもつてゐるやうに見える。我々獨逸人は、よし一人のヘエゲルが遂に居なかつたとしてもヘエゲル派であり——我々が（すべての拉丁人等と反對に）『ある』ところのものよりも、生成や發展へ本能的に、一のより深き意義とより豊かなる價值とを賦與する限りに於て——我々は殆んど『存在』といふ概念の有効性を信じないのである——同じくまた我々が、我の人間の論理が論理そのものであり、唯一の種類の論理であるといふことを、それに許容すべく傾いてゐない限りに於て（我々はむしろ、それがただ一の特種の場合に過ぎない、恐らくは最も奇異なる、最も馬鹿げたものの一であつたかも知れないことを、我々自らに信じさせようとしたであらう）。第四の問題は、あの悲觀論、換言すれば存在の價值の問題をもつてのシ・オペンハウエルが、獨逸人であらねばならなかつたかどうかであらう。私は信じない。そのあとでこの問題が確實に期待される——ある魂の星學者がその日時を算出し得たやうに——べきであつたところの事件は、基督教の神に對する信仰の滅亡は、科學的無神論の勝利は、すべての種族が功績と名譽とを分たねばならぬ全歐羅巴的な事件である。反對に、丁度獨逸人等に、シ・オペンハウエルが時代を同じうして生きてゐたところ

のあの獨逸人等に歸すべきであつた——無神論のこの勝利を最も久しく且つ最も危険に延引させたのは。殊にヘエゲルは傑出したるその抑止者であつた——我々の第六感、『歴史感』の助けをかりて最終まで存在の神聖なことを我々に説明すべく、彼のなしたる素晴らしい試みによつて。シ・オペンハウエルは哲學者として、我々獨逸人が有したる最初の公然的な、撓ぐべからざる無神論者であつた。ヘエゲルに對する彼の敵意は、ここにその背景をもつてゐた。存在の非神聖は彼にまで、何等かの極つた分りきつた、争ふべからざるものと見做された。彼はいつもその哲學的沈着をなくして、憤怒に陥つた——誰れかがこの點に躊躇したり廻り道をしたるのを見たときに。この點に彼の正直全體が横はつてゐる。無條件な、正直な無神論は恰も、彼の問題をもち出すことの『前提』である——歐羅巴の良心の最終に且つ骨折つて護られたる勝利として、結局神に對する信仰の虚偽を禁ずるところの、二千年に亘る、眞實への訓練の最も効果の多い幕として……人々は何が實際基督教の神に打ち勝つたかを見てゐる。基督教の道德そのものであり、いよいよ嚴格にとられたる實直の概念であり、科學的良心へ、どんなにしても理智的清潔へ翻譯され昇華された基督教の良心の聽悔的煩瑣である。自然を、宛もそれがある神の温情を心遣ひの證據でもあるかの如く見做すのは。歴史を、ある道義的世界秩序及び道義的最終目的の持続的證據としてある神的理性の名譽にまで註釋し去るのは。自己の經

驗を、信心深き人々が可なり久しい間説明してゐた如く、宛もすべてが攝理でありすべてが目示であり、すべてが魂の救ひの爲めに考へ出され送り出されたのであるかのごとく説明するのは。それは今や過ぎ去つてゐる。それはそれ自身に反對して良心をもつてゐる。それはすべてのより細緻なる良心にまで、無作法な、不正直なこととして、虚偽、女性主義、懦弱、臆病としてとられる——何物かによつて我々が、よき歐羅巴人であり、歐羅巴の最も久しき最も勇敢なる自己克服の相續者であるならば、かうした嚴格さをもつて。我々が基督教的解釋をそんな具合に我々自身から排斥し、その「意義」を貨幣偽造として罪するとき、今直ちに一の恐るべき仕方にて、「抑々存在なるものは意義を有するか？」といふシ。オペンハウエル式の疑問が我々へやつて来る。ただ完全に、あらゆるその深さに於て、聴取られるだけに、二三世紀を要すべきあの疑問である。シ。オペンハウエル自身がこの問題に對して答へたところのものは、(人々よ私に許せ)何等か輕率な、年少的なものであり、單なる一の妥協に過ぎず、神に對する信仰と共に立ち退きの通告を受けたところの、丁度あの基督教的禁欲的道德遠近法への拘着に過ぎなかつた……けれども彼は前述の如くよき歐羅巴人としてで、獨逸人としてでなくあの疑問をもち出した。それとも、獨逸人等は、少くともシ。オペンハウエル式の疑問を占有したときの仕方でもつて、彼の問題への彼等の内面的な連絡や類縁を彼等の準備を、彼等の需要を證據立

てたか？ 獨逸に於てもシ。オペンハウエルの後、——可なり晩くに——彼からもち出された問題に關して、考へられたり印刷されたりしてゐるといふことは、この密接な連絡に都合のいいやうに決定すべくもつとも十分でない。反對に人はこのシ。オペンハウエル以後悲觀論の特有なる拙さを切言することが出来た。獨逸人等は明らかにその際彼等の素質に於ての如く振舞はない。私はかく言へばとて全然エドヴァルト・ハルトマンを暗示してゐるのでない。反對に、彼が我々にとつて餘りに巧みであるといふ私の舊い猜疑は今も尚ほなくなつてゐないのである。私は言ひ度い——始めからの憎むべき悪戯者として彼は、恐らくただに獨逸の悲觀論を愚弄しただけでない。どこまで人が泡沫會社創立の時代に於て、獨逸人自身をごまかし得たかを、ハルトマンが結局獨逸人へ遺言して「詰し」得たと。しかし乍ら私は問ふ——人は思ふにあの古い鳴獨樂のバアンゼン(彼の現實辯證的困苦と『個人的災厄』とを中心として一生の間樂しく廻り通した)を、獨逸人等の名譽にまで數へ上げねばならぬか？ それは獨逸的であつたか？ (私は序でながら彼の述作を推獎する。私はそれらのものを反悲觀論的な食物として用ゐた——とりわけ、最も通じの悪くなつた身心をさへ樂にして呉れるところの、彼の *elegantiae psychologicae* (心理的溫雅)の爲めに)。それとも、あの甘い處女性の使徒なるマイランデルの如き、あんなディレクタントや老嬢を純粹の獨逸人の間に數へることが出来たか？ 要するに彼女は

猶太人であつたらう(すべての猶太人は、道徳を説くときに甘くなる)。パアンゼンも、マイラントルも、エドアルト・フォン・ハルトマンすらも、シ・オベンハウエルの悲觀論が、一の神をなくされた、愚劣に、盲目に、狂亂的に、疑はしくなつた世界への彼の怯氣附いた瞥見が、彼の正直な恐怖が……猶太人の間に於ける例外的な場合であつたのみならず、また一の獨逸的な出來事であつたかどうか、に就いての疑問に對し、しつかりした手掛りを與へて呉れない。そして一方では、前景に立つところの他のすべてのものは、我々の勇敢なる政事は、餘り哲學的でない主義 "Deutschland, Deutschland über Alles" —— (譯者註、獨逸の國歌の初行)でもつて、可なり截然と一切の事物を片附てしまふところの我々の愉快なる祖國主義は、したがつて *anb specie speciei* は、即ち獨逸の *species* は明々白々に反對のことを證明してゐる。然り！ 今日の獨逸人等は決して悲觀論者でない！ そしてシ・オベンハウエルは悲觀論者であつた——今一度繰り返して言ふが、よき歐羅巴人としてで、獨逸人としてでなく、

三五八

精神の百姓一揆。——我々歐羅巴人は一の巨怪なる廢墟の世界を目の前に控へてゐる。そこではあるものが尙ほ高く聳えてゐる。そこでは多くのものが朽ち腐れて物凄く立つてゐる。が大抵のものは既

に地上に横はつてゐる——十分繪畫的に。どこにより美しき廢墟があつたか？ そして大きな雜草小さな雜草に伸び覆はれてゐる。この没落の町こそは教會である。我々は基督教の宗教的社會が最も深い根柢に至るまで震撼されてゐるのを見る。神に對する信仰は顛覆されてゐる。禁欲的理想に對する信仰は今その最終の鬨を闘つてゐる。基督教の如きかやうなる久しく根柢的に築かれた建物は——それは羅馬人の最終の建物であつた——勿論立所に破壊され得なかつた。あらゆる種類の地震がそこに揺らなければならなかつた。突き刺したり、掘り穿つたり、噛み切つたり、濡らしたりするところのあらゆる種類の精神が、そこに手傳はねばならなかつた。けれども最も奇異なるは、基督教を把持保存することに最も多く骨折つたところのものが、丁度その最もよき破壊者になつたことである——それは獨逸人のことだ。獨逸人は教會の本質を理解しないやうに見える。彼等はそれをなすべく十分に精神的でないか？ 十分に疑惑的でないか？ 教會の建物はいつも、精神の南國的自由及び寛容の上に立つてゐる。同じくまた自然や、人間や、精神に對する南國的な猜疑の上に立つてゐる。それは北方人の有するのと、全く異つた人間の智識に、人間の經驗の上に立つてゐる。ルウテルの宗教改革はその全幅に於て何等かの『複雑なもの』に對する單純の憤激であつた。用心深くいふならば、大に寛恕してやるべき一の粗野な朴直な誤解であつた。人々はある勝ち誇つた教會の表白を理解しないで、

ただ腐敗のみ見た。人々は高貴なる懷疑を、各々の勝ち誇つた自信をもつた力が許すところの懷疑や寛容のあの贅澤を誤解した人々は今日可なり容易く、如何にルウテルが力に闘するすべての主要な問題に於て宿命的に近視眼的な、淺薄な、不用意な天分をもつてゐたかを看過する。そして特に民衆から出た人物として、彼は支配階級のすべての遺産や、權力に對するあらゆる本能を缺いてゐた。乃ちあの羅馬人の事業を恢復せんとする彼の事業は、彼の意志は、彼が意欲したのでもなく意識したのでもなしに、單に一の破壊事業の發端になつただけである。彼は老いたる蜘蛛が最も注意深く且つ最も久しくかかつて編み上げた場所に、正直な憤りをもつて捻ぢほどいた、すたすたに引き裂いた。彼は各人の手に神聖な書物を渡した。そこでそれらの物は遂に文献學者の手に落ちた。即ち書物に土臺を置かない各の信仰の滅却者の手に落ちた。彼は宗教會議の靈感に對する信仰を却けながら、『教會』といふ概念を滅ぼした。何故といつて教會を建てたところの靈感的な精神が、教會のうちに尙ほ生きて居り、尙ほ築き、尙ほ彼の家を築き続けるといふ前提の下にのみ、『教會』といふ概念は力を保持するのだから。彼は僧侶に婦人との性交を返し與へた。しかし乍ら民衆が、とりわけ民衆からの婦人が可能であるところの畏敬の四分の三は、この點に於て例外的な人物が他の點に於ても例外的な人物であるだらうといふ信仰の上に立つてゐる。丁度このところにこそ、人間のうちなる何等か超人的なもの

に、奇蹟に、人間のうちなる救ひの神に對する民衆的信仰が、その最も利巧な、老猾な辯護者をもつてゐるのである。ルウテルは僧侶に婦人を與へたあとで、彼から耳懺悔をとり去らねばならなかつた。それは心理的に正しいことであつた。しかし乍らそれと共に實際彼は、最も深遠な功利が常に一の神聖な耳であり、一の沈黙した泉であり、一の祕密を守る墓であることに存してゐたところの、基督教の僧侶そのものを逐ひ出してしまつた。『各人が彼自身の僧侶』といふやうな方式及び彼等の農民的なずるさの後に、ルウテルには教會の考へたやうな『より高い人間』や『より高い人間』の支配に對する底知れぬ憎惡が隠れてゐた。彼は到達することを知らなかつたやうな一の理想を打ち碎いた——この理想の變質と闘つたり、それを忌み嫌つたりするやうに見え乍ら。事實上彼は、あの不可能な僧は、Homines religiosi の支配を非認した。かくて彼は、彼が市民的秩序に關してもあんなにも氣短かに闘つたところの丁度同じことを——一の『百姓一揆』を——教會的社會秩序のうちに齎らした。その後善かれ、悪しかれ、彼の宗教改革から生じたところの、そして今日凡そ計量され得るところのすべてのもの——それに就いて單純にルウテルを賞讃し或は非難すべく、思ふに誰が十分ナイフであつたらうか？ 彼はすべてに於て無邪氣である。彼は何を自分が爲したかを知らなかつた。特に北方に於て歐羅巴の精神を淺薄にすることは、若し人々が道徳的な言葉で記されることを好ぶならば、あの精神

を人よしにすることは、ルウテルの宗教改革と共にしつかりした一歩武を進めたものである。それには何等の疑ひを容れない。そして同じく彼の宗教改革によつて、あの精神の動搖と不安とが、獨立不羈へのその渴望が、自由に對する権利のその信仰が、その『自然らしさ』が生じ來た。若し人々が最後に今日『近代科學』として尊敬されてゐるものに、準備をなし便宜をはかつたといふことの價値を、あの改革に歸しようとするならば、勿論の次ぎことをも附け加へて置かなければならぬ。曰く、それは近代の學者の偏執に、即ちその畏敬や羞恥や深みの缺乏にも責任を分たねばならぬ。また認識の事項に於けるナイイフな忠實や馬鹿正直全體にも、換言すれば最近二世紀間に特有である、そして今日までの悲觀論も遂に我々を救ひ出して呉れないやうな、あの精神の平民主義にも責めを分たねばならぬ、『近代的觀念』も亦、基督教會のうちに最大の紀念碑を建てたところの、より冷かな、より曖昧なより懷疑的な兩國精神に對する、北國のこの百姓一揆に屬してゐる。我々をして最後に、教會が何であるか、しかも各の國家に對照して何であるかを忘れしめるな。教會は何よりも先づ、より精神的な人々に最上の階級を保證するところの、そしてすべてのより粗惡な強壓手段を禁止する爲めに、精神の權力を信ずるところの統治組織體である。ただこれによつてのみ教會は如何なる事情の下にても、國家より高貴なる制度である。

三五九

精神及び道德の他の背景に對する復讐。——道德が——道德がその最も危険なる最も意地悪き辯護者を、どこにもつてゐると汝等は思ふか？……ある不出來な人間は、道德を樂しみ得べく十分なる精神をもつてゐないで、それを知るべく十分なる教養をのみもつてゐる。退屈して居り、飽足して居り、自己侮蔑者である。何等かの相續された財産によつて生憎と、『労働の祝福』だとか、『その日その日の仕事』に自らを忘れることだとかいふやうな、最終の慰めからも欺かれる。自らの生存を本當に恥ぢてゐる——恐らくはその上に若干の小さな惡徳をもつてゐるのであらう——そして一方では彼の權利を有しない書物、或は彼の消化し得るよりより精神的な社交範圍によつて、自らを愈々悪く甘やかす、浮誇に興奮し易くすることを免れ得ないやうな人物は、かくの如きすつかり毒の廻つた人間は——何故といつて、かくの如き不出來な人間には、精神が毒になり、教養が毒になり、所有物が毒になり、孤獨が毒になるのだから——結局復讐の、復讐への意志の常習に陥る……彼が少くとも彼の想像のうちに、完成した復讐の悦びを自ら與へる爲め、より精神的な人々に對する優越の外觀（自分自身の眼から見た）を自らに與へる爲め、何を必要に、絶對的に必要に感じたか汝等は思ふか？ それは常に道德で

ある(それに就いては賭をすることが出来る)常に大なる道德の言葉である。常に正義だとか、睿智だとか、神聖だとか、徳だとかいふやうな調子高い言葉である。常に身振りのストイク主義である(人の有しないものを、ストイク主義で如何によく包み匿すかよ!……)。常に利口な沈黙や、慇懃や、温厚の外套である。そして何と呼ばれてゐるに係はらず、癒すべからざる自己侮蔑者が、また癒し難く浮誇なる人間が着て歩く程のすべての理想家的外套である。私は誤解されたくない。かくの如き生れ乍らの精神の敵から折々、民衆に依つて聖徒だとか賢人だとかの名の下に尊敬される、あの稀なる人間性の塊りが出て来る。騒ぎを起したり歴史を作つたりするあの道德の化物が、かくの如き人間から来る。聖徒アウグスティンはさういふ人間の一人である。精神に對する恐怖や、精神に對する復讐や——お如何に屢々これ等の衝動力に富んだ悪徳が徳の根本になつたかよ! 然り、徳そのものに! さて我々自らの間に尋ねるのだが、會つて折々地上になされたる、あの睿智に對する哲學者の言ひ前)あらゆる言ひ前のうちの最も氣狂ひ染みた、最も不遜なものである)からも——それはこれまで常に、希臘に於ける如く印度に於て、何よりも先づ隠匿でなかつたか? 恐らく折々は左様に多くの虚言を神聖にした教育上の見地から、それは屢々人に對する信仰に依つて(一の誤謬に依つて)、自分自身に對して護られねばならないやうな、出来つつあるもの、成長しつつあるものに對する、弟子共に對す

る優しき心遣ひであつたらう……しかし乍らより度々の場合に於てそれは、哲學者が疲勞や、老齡や、冷却や、硬化から自を救ふべきかくれ家である——近づく最後の感情として、禽獸共が死の前にもつところのあの本能の賢さとして——彼等は傍へより、靜かにし、孤獨を選び、洞穴へはひこみ、賢くなる……如何に? 睿智は精神——からの哲學者の一の隠匿か?——

### 三六〇

混同されたる二種類の原因。——私にまで私の最も大切な歩みの、進歩の一と思はれる——私が行爲の原因を、かくかくの方向に於けるかくかくの目的に對するかくかくの行爲といふもの原因から差別することを學んだのは、初めの種類の原因は、如何様にかして、何かの爲めに用ひられることを待ち受けるころの、蓄積された力の一分量である。これに反して第二の種類の原因は、あの力に比べて全くつまらないものである。大抵は、依つてもつてあの分量が一定の仕方でもつて自らを『放出』するところの小さな偶發である。火藥樽に對するマッチである。これらの小さな偶發とマッチとの中に私は、すべての所謂『目的』を數へる。同様に、更により多く所謂『職分』を數へる。それらのものは、前に述べたる如く如何様にしてでも用ひ盡されることを迫るところの、心の巨人なる分量の力に



比べて、割合に勝手な、出鱈目な、殆んどどうでもいいものである。人は通例異つた見方でこれを見てゐる。彼は丁度標的(目的職分など)のうちに衝動的な力を見ることに慣れてゐる——一の原始的な誤謬に従つて。しかしながらそれは指導的な力たるに過ぎない。その場合舵手と蒸氣とが混同されてゐたのである。しかも常に舵手であり、指導的な力であるのでもない……『標的』は、『目的』は随分展、體のいい口實たるに過ぎないではないか？ 次のやうに言はれることを欲しない虚榮心の追加的な自己満足ではないか？ 曰く、船はそれが偶然にはひつた流れにしたがふのであると。曰く、船はそちらへ行かねばならぬ故に、行かうと『欲する』のだと。曰く、船は成程一の方向をもつてゐる、けれども全然如何なる舵手をもてないと。我々は尙ほ『目的』といふ概念の批評を必要とするのである。

三六一

俳優の問題。——俳優の問題は久しい間私を不安にしてゐた。私は、人々がまづ其處から『藝術家』と云ふ危険な概念へ、怒しがたき懇切を以てこれまで取扱はれてゐた概念へ近づかないであらうかどうかについて、ふたしかであつた(そして今でも尙ほ折々さうなのである)。善き良心をもつた虚偽。

力として發出するところの、所謂『性格』を押しつけ、溢れ出で、折々減ぼし去るところの假裝。役や假面へ、一の假象へはいらうとする内的な願望。もはや最も近き最も狭い功用へ役立つことに於て自らを満足させられない、あらゆる種類の適應能力の餘剰。すべての斯うした物は思ふに唯だ俳優その物にのみ屬するのではあるまいか？……かくの如き本能は下級民衆の家柄に於て最も容易く發展するであらう——それらの民衆は推移極りなき壓迫や拘束の下に、念入りな從屬的な態度に於てその生活を持続して行かねばならなかつた。彼等は素直にその境遇へ適合すべく、新らしき事情を常に新らしく受け入れて行くべく、幾度も幾度も別の人間として自らを表はし示さねばならなかつた——各の風の吹く方へ外套を垂れるやうになり乍ら、それに依つて殆んど外套そのものになり乍ら——禽獸の間に物眞似と呼ばれるところの、永久に隠れん坊をやる體化され肉化され藝術の名人として。そして遂には、這の全く時代から時代へ蓄積された能力が支配的に非理性的に御し難くなり、本能として他の本能を指揮することを學び、そして俳優を、『藝術家』を生むのだ(茶番師、道化者、落語家などを筆頭として、古典的な召使のシル・ブラスをも。何故といつてかくの如きタイプのうちには、藝術家の先驅を、また随分屢々『天才』の先驅をすらも有するのである)。より高き社會的條件の下にも亦、似寄つた壓迫の下に似寄つた種類の人間が出来て来る。ただその際大抵は、俳優の本能が他の本能に

依つて嚴重に食ひ止められる——例へば『外交官』の間などで。その上私は信ずるであらう——よき外交官にあつては、彼にしてならうとさへ思へば、よき舞臺俳優になるのは常に何でもないのである。しかし乍ら猶太人に關しては、優秀なる適應藝術のあの民族に關しては、我々はこの考へ方にしたがつて、彼等のうちに、最初から謂はば俳優養成の世界歴史的制度を、本當の俳優躰化場を見ることが出来た。げに次ぎの間は現在にも適切である。曰く、如何なるよき俳優が今日——猶太人でないか？ 猶太人はまた先天的の文學者として、歐羅巴の印刷物の實際的支配者として、その俳優的能力の土臺の上にかうした力を働かせる。何故といつて文學者は本質的に俳優であるから。即ち彼は『精通者』を、『専門家』を演ずる。最後には婦人である。婦人の歴史全體に就いて考へて見るならば、彼等は先づ、そして特に俳優であることを免れないではないか？ 婦人に催眠術をかけたところの醫者に聽くか、或は最後に彼等を愛し、また彼等から『催眠術をかけ』られてみるかせよ！ それによつていつもどんなことが生じて來るか！ 彼女等は、『彼等自らを委ねてしまふ』ときにすらも、『彼等自らを體裁よくしてゐる』のである……婦人はかやうに藝術的なのである……

## 三六二

歐羅巴を男性化することの我々の信仰。——それは我々がナポレオンに負ふところのものである。

(そしてかの、民族間の『同胞性』や一般に花の如き心情の交換などを追ひ求めたところの、佛蘭西革命に聊かも負うてゐるのでない)——歴史上比類を見ざる若干の好戰的な世紀が今日相續き得るといふのは。換言すれば、我々が古典的戦争時代へ、すべての來るべき幾十世紀が羨望と畏敬とをもつて完全性の作品を回顧するであらうやうな、大規模の(手段や、才能や、訓練に關して)、博學的であると共に民衆的な戦争の時代にはいつてゐるといふのは。けだしかうした戦争的光榮を生じて來る國民的運動は、ナポレオンに對する反對衝撃に過ぎない。そしてナポレオン無しには存在しなかつたであらう。したがつていつかは彼にまで、歐羅巴に於ける男子が再び商人や俗人共の頭になつたといふこと、恐らくは『婦人』の頭にすらもなつたといふことの事實を歸し得るであらう——婦人は基督教と十八世紀の狂熱的な精神とによつて、更により多く『近代的觀念』によつて甘やかされてゐたのである。近代的觀念のうちに、したがつて文明のうちに、個人的仇敵の如きものを見たところのナポレオンは、この敵から自らをルネッサンスの最も大なる繼續者の一人として證據立てた。彼は古代的性格の全片を、恐らくは最も決定的なそれを、花崗石のそれを再びもち上げた。そして誰が知つてゐるか？

——古代的性格のこの片塊が結局再び國民的運動に打ち勝たないであらうかどうか、また肯定的な重

味に於てナポレオンの相続人繼承者にならないで済むかどうかといふことを。かのナポレオンは人々の知る如く、一の歐羅巴を意欲した、しかもそれをこの地上の君主として意欲したのである。

三六三

如何に各の性が愛に就いての先入見を有するか。——私が一夫一婦的先入見に對してなさんとしてゐるあらゆる承認にも係はらず、尙ほ且つ私は、人々が男女間の愛に於ける等しき權利に就いて語るのを到底受け容れないであらう。左様な等しき權利といふやうなものは無いのである。けだし、男子と婦人とは愛といふ言葉の下に各異つたあるものを理解してゐる。そして、一の性が他の性のうちに等しき感情を、「愛」の等しき概念を豫定しないといふのは、兩性に於ける愛の諸條件の一である。婦人が愛に就いて理解するところのものは、可なり明白である。曰く、如何なる願慮も、如何なる躊躇も無しに、むしろ制限や條件のついた歸服の考へに對する羞恥や恐怖を伴つて、魂と肉體とをもつてする完全な歸服（單なる歸依でなく）である。かくの如く條件の存在しない點に於て、彼女の愛は正しく一の信仰である。婦人は何等の他のものを有しない。男子はある婦人を愛するとき、彼女から丁度この愛を意欲する。されば彼自らに關して言へば、婦人の愛の前提から最も遠ざかつてゐる。し

かしながら自分達の方でも完全なる歸依への願望に縁が無いでもないやうな男子等がまたあり得たとしたならば、彼等は實際に男子ではないのだ。婦人の如く愛するところの男子は、それによつて奴隷になる。けれども婦人の如く愛するところの婦人は、それによつてより完全な婦人になる……婦人の欲情は自身自身の權利に對する彼女の無條件的な諦めのうちに、對手の側に等しき Pathos が、等しき諦めへの意欲が存在しないことを豫定してゐる。何故といつて双方が愛から自らを諦めてしまつたとき、それから生じて來るものは——今私は何であるかを知らないが、恐らくは一の Horror vacui であらうか？ 婦人は所有物としてとられ、受けとられることを願ふ。『所有物』、『所有される』といふ概念のうちにはいつてしまふことを願ふ。したがつて婦人は、とるところの、自分自らを與へたり棄てたりしないところの、そして反對にむしろ（婦人が自ら彼に與へるところの力や、幸福や、信仰の増加によつて）『自身』のうちにより豊かにされねばならぬところの人を欲する。婦人は自らを棄て、男子はそれをとる。私は思ふ、人は如何なる社會的計畫によつても、また正義への最善なる意志によつても、この自然のコントラストを超えるものでなからうと——この對立の酷たらしき、恐ろしき、謎めいた、反道徳的なところを絶えず目の前に置かないといふのが、如何に願はしきことであらうとも。けだし愛は、至き、大なる、完全なるものとして考へれば自然である。そして自然はあらゆる永久性

に於て『反道徳的』なあるものである。それ故貞實は婦人の愛のうちに包括されてゐる。それはその定義から出て来る。男子にあつては、貞實が、その愛につれて容易く起つて来ることもある——多分は感謝として、或は獨特の趣味や所謂親和力として。しかし乍らそれは彼の愛の本質に屬しない。しかも、愛があだかも所有の意欲であつて、諦めや放棄でないやうな男子に於ける、愛と貞實との自然的撞着について談るのも、強ち不當でない位である。しかし乍ら所有の意欲はいつも所有と共に結末へ来る……事實上男子の愛を持続せしむるものは、彼（この『所有』を稀に且つ晩く承認する）のより細緻な、より猜疑的な所有欲である。この限りに於て、愛は歸依の後尙ほ増進するといふことが可能でさへもある。彼は、ある婦人がもはや『引き渡す可き』何物をも持たないといふことを、容易く承認しないのである。

## 三六四

隱遁者は談る。——人々と交際することの技術は本來、料理場に信用の置けない御馳走を食べることの熟練（長い練習を豫定するところの）に土臺を置く。人が狼の空腹を抱いて食卓へ来るとしたならば、すべてのことが容易である（メフィストオフェレスが言つてゐるやうに、『最も悪いつきあひは君

に經驗させる——』。しかし乍ら人はそれを、この狼の空腹を要するとき、それを有しないのである。——ああ、同胞の人間を消化することの如何に困難であるかよ！ 第一の原理——ある不幸に際しての如く彼の勇氣を振り起し、勇敢に掴み、それと共に自分自身を嘆賞し、彼の反感を齒と齒の間に入れ、彼の嫌惡を呑み下してしまふのである。第二の原理——彼の同胞を、例へば賞讃などによつて『よりよくし』彼が自分自身に就いての満足を汗の如く浮べて来るやうにする。或は彼の善良なる、若しくは『興味ある』性質の片隅をとらへて引つ張るのである——彼の徳全體をとり出し、その引き寄せたものの裏のうちに同胞を包みかくしてしまふことが出来るまで。第三の原理——自己催眠。硝子のボタンを見つめる如く彼の社交の對象物を見つめるのである——その際不快を感じることを休めて、知らず知らず眠入つて、硬直になり不動になるまで。十分に試験され、欠くべからざるものとして賞讃されたる、しかし乍らまだ科學的に方式を作られないところの、結婚生活及び友情生活に於て用ひられる一の治療方法である。その知れ渡つた名稱は——忍耐である。

## 三六五

今一度隱遁者は談る。——我々も亦「人々」と交際する。我々も亦、人々が我々を（着物として）

知り、尊び、求めるところの着物をつつましやかに着る。そして社會に、言ひ換へればさう呼ばれることを欲しない假装者の間に立ち交る。我々も亦すべての利口な假面の如く振舞ひ、我々の『着物』に關係のない冬々の好奇心を、慇懃な仕方でもつて戸口の前の腰掛に脱ぎ捨てる。しかし乍ら、人々の間に、人々と共に『往來する』他の遣り方藝當もある。例へば幽霊の如くに——それは人が早く人々を免れ、或は恐れしめようと思ふときに甚だ便利である。その見本を舉げて見ると、人が我々を掴まうとする。そして我々を掴むことが出来ない。それが人を恐れしめる。或は、我々が閉め切つた戸口の間からはいつて行く。或は、すべての明りが消えてゐるときに。或は我々が既に死んでしまつた後に。後者は優秀なる死後の人物の遣り方である。『汝等はどうか考へるか？』とかやうなる人が會つて氣短かにいつた、『我々が我々の周圍なるこの縁遠さや、冷たさや墓の如き静けさに堪へることを悦ぶであらうか——この地中の隠れた無言の發見されざる寂寥全體は、我々にあつて生と呼ばれてゐるが、同様に死とも呼ばれてよかつた——我々にして、何が我々から出來て來るであらうかを、また我々が、我々死後の人物が死の後で始めて我々の生に到着し、生き生きしたものに、ああ！ 非常に生き生きしたものに！ なるのだといふことを知らなかつたならば！』

三六六

博學な書物を目の前に置いて。——我々は書物の間にのみ、書物の獎勵によつてのみ思想へ到着するやうな人々に屬しない。我々の習慣は、最も好んで淋しき山の上に、或は途すらも考え深くなるやうな海邊に近く、歩き乍ら、跳び乍ら、攀ぢ乍ら、攀ぢ乍ら、舞踏し乍ら、外氣のうちに思想するのである。書物や人間や音楽についての我々の第一の價値問題は、『彼は歩き得るか？ 尚ほその上に、彼は舞踏し得るか？』といふのである……我々は滅多に讀まない。我々はそのことの爲めにより、悪しく讀むのではない。おお、ある人が如何にして彼の思想へ到着したかを、我々が如何に速かに洞見するかよ——インキ壺の前に、腹を押し狭めて、紙の上に頭を垂れて、坐り乍らにかどうかを！ おお、如何に速かに我々がそのとき彼の書物を棄て去るかよ！ 壓搾された内臓は、室内の空氣や天井や狭まくるしさが自らを裏切る如く裏切る——そのことに就いては賭物をする事が出来る。これは私が、ある正直な博學な書物を、有難く非常に有難く思ひ乍ら、またほつとした心持で閉ぢたときの私の感情であつた……博學な人の書物には、殆んど常に何等かの壓迫する、壓迫されたものがある。『専門家』はどこかに現はれて來る。彼の熱心は、彼の眞面目さは、彼の憤りは、自分の坐つて紡いでゐる片隅に對す

る彼の過重は、彼の隆肉は、——各の専門家はその隆肉をもつてゐる。博學な書物はまた常に捻ぢ曲められた魂を反映する。各のせうばいは捻ぢゆがめる。青年時代を共に過ごした友人等が彼等の學問を自分のものにしたあとで再び合つて見よ。ああ、如何に反對のことがいつも起つてゐるかよ！ ああ如何に彼等が彼等自らを常にその學問に依つて占領され所有されてゐるかよ！ 彼等の片隅に相應しく伸びひろがつて、爲體の知れない程揉みくちやにされて、拘束されて、その平靜をなくされて、至るところに骨張り角立つて、ただ一個所にのみ無暗に丸つこくなつてゐる——我々はかくの如き彼等を再び見出すとき、心を動かされて沈黙してしまふ。各のせうばいは、それが金の床をもつとしたところで（譯者註——「せうばいは金の床をもつ」といふ獨逸の諺がある）、その上に鉛の天井をもつてゐる。それが魂の上におつかぶさつて来て、お仕舞には妙ちきりんな形に壓しひしやげてしまふ。それには變更すべき何物もない。何等かの教育方策によつてこの醜化を除き去ることが可能であると考へるな。恐らくはすべてのものが餘りに高價に現はれてゐる地上に於ては、あらゆる種類の熱達が餘りに高く拂はれる。人は自分の専門の犠牲者でもあるといふことの値を拂つて、その専門の友人である。しかし乍ら汝等は異つた仕方である——「より正當に」、取り分けより便利に専門家をもち度いと思ふ。然うではないか、私の同時代者諸君よ！ まことに結構だ！ しかし乍らその場合汝等は、直

ちにまた異つたあるものを得るであらう。即ち職人や友人の代りに文學者を、氣の利いた『多方向た』著作家を得るであらう。それには勿論隆肉が欠けてゐる——彼が精神の店番、文化の『運搬者』として、汝等の前にこさえて見せる御辭儀の爲めの隆肉を勘定に入れないならば。その著作家は本來何物でもないのだが、殆んどあらゆるものを『代表する』。彼は専門家を演じたり『代表』したりする。彼はまたこの地位に於て自らの拂はれ、尊敬され、祭り上げられるやうにすることを、あらゆるつましさに於て自ら引き受ける。否、私の博學なる友人達よ！ 私は汝等の隆肉の爲めにすらも汝等を祝福する！ そして汝等が私と同じく、文學者等や文化寄生物どもを輕蔑する故に！ そして汝等が汝等の精神をもつてせうばいをするを知らない故に！ そして貨幣價値に於て云ひ表せない無数の意見をもつてゐる故に！ そして汝等が、汝等自らがあらぬところの何物をも代表しない故に！ 汝等の唯一の願ひは、汝等のせうばいの名人になることである故に——あらゆる種類の熱達や有爲に對する畏敬に於て、また文學及び美術に於けるあらゆる外見的なもの、不純なもの、修飾されたもの、巧妙なもの、煽動的なもの、俳優的なもの——訓練や豫備教育の絶對的な純粹性に關して汝等の試験に堪へ得ないところのすべての、最も無遠慮なる否認をもつて！（天才すらもかくの如き缺陷を通り越すのに役立たない——如何によくそれについて欺くことは出来ようとも。人は一度我々の最も天

分ある畫家音楽者等を近くに見たならば右のことを理解する。彼等はすべて皆殆んど例外なく、様式や臨機（ついでに）の所置や加之原理の利口な思ひつきによつて、技巧的に追加的にあの純粹性や、練習教化のあの堅實性の外觀を自分のものにするを知つてゐる——勿論それによつて自分自身を欺くことなしに、それによつて彼等自身の悪しき良心をいつまでも無口にして置くことなしに。なぜといつて、汝等は知つてゐるではないか？——すべての大なる近代の藝術家等が悪しき良心の爲めに苦しんでゐるといふことを……)

三六七

如何に人は先づ藝術品に於て差別をたてねばならぬか。——思想され、詩作され、畫作され、曲作され、加之建築（ついでに）されたり彫刻されたりするすべてのものは、獨白的藝術に屬するか、目撃者を前にした藝術に屬するかである。後者のうちには尙ほ、神に對する信仰を包括するあの外觀上の獨白藝術が、祈禱の全抒情詩がはいる。なぜといつて信心深き人にとつては如何なる孤獨もないのだから。この發明を我々が、我々無神者が始めてなしたのである。私はある藝術家の視野全體に對する、次ぎのものより深き如何なる差別をも知らない。曰く、彼が目撃者の目から、彼の出來上るところの藝術品の方を

（「彼自身」の方を）打ち眺めるか、それとも各の獨白藝術の本質的なものがある如く、「世間を忘れた」か？ 後者は忘却の上に立つてゐる。それは忘却の音楽である。

三六八

キニイク派は談る。——ワグネルの音楽に對する私の反對は生理的反對である。何の爲めにこれを先づ美的法式の下に蔽ひかくさねばならぬか？ 私の『事實』は、この音楽が先づ私の上には、たつきかけるとき、私がおもはやく呼吸し得ないといふことである。私の脚が直ぐにそれに對して腹立たしくなり、反抗するやうになるといふことである。私の脚は拍子や舞踏や行進に對する需要をもつてゐる。それは音楽から何よりも先づ、よき歩行や、濶歩や、跳躍や、舞踏に横はるところのえくすたあぜである。しかし乍ら私の胃も抗議をもち出さないか？ 私の心臓も？ 私の血液の循環も？ 私の腸も？ 私はその爲めに知らず知らず嘔吐（吐）せぬならぬか？ さてかく私は自ら尋ねる——私の全身は抑々音楽から實際何を要求するか？ 私は、それがほつと息をつきたいのであると思ふ。宛もすべての動物的機能が軽い、大膽な、自由な、落ちつきのある律動によつて活潑にされねばならなかつたやうに。宛も鋼鐵の、鉛の生活が、金のよき優しき和聲によつて鍍金されねばならなかつたやうに。私

の憂鬱は完全のかくれ家や深潭のうちに安息し度いと希ふ。その爲めに私は音楽を要する。戯曲は私に何であらう！『民衆』が依つてもつて彼等の満足を得るところの戯曲の道義的、えくすたあぜの痙攣は何であらう！俳優の奇術的な身振なぞが何であらう！……人々よ、私が本質的に芝居嫌ひに出来てゐることを洞察せよ。ところでワグネルは反對に本質的に劇場的人物であり俳優であり、音楽者としてすらも、これまでに存在した最も狂熱的な Mimomane であつた！そしてついで乍らいふと、『ドラマは目的である、音楽はいつもその手段たるに過ぎない』といふのがワグネルの理論であつた。之に反して彼の實地は始めから終ひまで、『態度が目的である。ドラマは、音楽も常にその手段たるに過ぎない』といふのであつた。音楽は戯曲的な様子や俳優の官能的な訴へ方の明白化、強化、内化の一手段として。そしてワグネルのドラマは色々の戯曲的態度に對する一の機會に過ぎない！ワグネルはすべての他の本能と共に、すべてのもの各のものに於て、大なる俳優の指導的本能をもつてゐた。そして前述の如く音楽者としても。このことを私は曾つて多少の骨を折つて、ある正直なワグネル主義者へ説明した。そして私は更につけ加へていふことの理由を有した、『希くは少しく汝自身に對してより正直であれ。我々は今劇場に居るのでない！劇場にあつては、我々はただ群衆としてのみ正直である。個々の人間として我々は偽る。我々自身をさへ瞞着する。我々は劇場へ行くとき、我々自身を

家へ送して置く。私々は我々自身の舌や撰擇の權利を、我々の趣味を諦らめる。我々が我々自身の四壁の間に神と人とに對して所有し且つ使用するやうな、我々の勇氣をすらもあきらめる。劇場へは、何人も彼の藝術の最も細緻なる感性をたづさへない。劇場の爲めに働いてゐるところの藝術家すらも。劇場に於ては人は民衆であり、公衆であり、獸群であり、婦人であり、パリサイ人であり、ワイワイ連であり、民主主義者であり、隣人であり、同胞である。そこでは最も個人的な本心すらも、『最大數』の水準化的魔力に降参する。そこでは愚劣が姪風や傳染病の如くはたらく。そこでは『隣人』が支配する。そこでは人が隣人になる……（私は、私の説明をきかされたワグネル主義者が私の生理的反對に對して答へたところのものを、述べることを忘れてゐた。曰く、『それならば汝は實際、我々の音楽に對して十分健全でないといふだけのことである。』）。

三六九

我々の中なる並列。——我々は、我々藝術家は自ら承認してはならないか？——我々の中に妙な不  
同のあるといふこと、一方には我々の趣味が、他方には我々の創造力が驚くべき仕方にて孤立して居  
り、孤立し續けて居り、別々の成長をなして居るといふことを。私の言はうとするのは、程度と *Temperament*



とを全然異にする年齢や、若さや、成熟や、軟熟や、朽敗なぞのありといふことである。即ち、例へば或る音楽者は一生の間、彼の悪い聴癖のついた耳や胸が重んじたり味つたり撰び出したりするものに矛盾するやうな、さういふ事物を創造し得たのである。彼は此矛盾を知ることすら要しなかつたのである！ 殆んどいやになるほど規則正しい経験が示す如く、人はたやすく其趣味を以て其力の趣味を凌駕することが出来る！——後者がその爲め麻痺させられ、産出を妨げられるといふことなしにすらも。しかし乍ら、反対な事も或る程度までは起り得る。そしてこれこそは、私が特に藝術家の注意をむけたがつたところのものである。一人の永續的に創造する者は、言葉の大なる意味に於ける『母』なる人間は、その精神の妊娠と分娩とのほかなる何事をも最早知らず聞かないやうな、自分自らと自分の仕事とを考へたり比べたりすべく如何なる時をも有たないやうな、尙ほ自分の趣味を行はうといふ意志を最早有しない、そして單にそれを忘れたり、立つたり横つたり倒れたりさせるやうな人物は、思ふに斯様な人物は遂に、彼が其批判を以て全然上に出てゐないやうな仕事をし出すであらう。乃ち、彼が彼等について又彼自らについて愚劣な事を言つたり、考へたりするといふやうに。私にまでこれは、多産的な藝術家等に於て殆んど當りまへの情態であるやうに見える。何人もある小兒を、その両親より以上に悪しく知らない。そしてこれは（巨きな一例を擧げて云へば）希臘の詩人的藝

術家的世界全體にすらも通用する。かの世界は、それが何をなしたかを竟に意識しなかつたのである……

## 三七〇

何が浪漫主義であるか？——少くとも私の友人達の間には、初め私が若干の巨きな誤謬と誇張とを以て、だが免に角希望を抱いてゐる者として、近代的世界へぶつかつて行つたと云ふことは、恐らく記憶にとどめられてゐるであらう。私は理會した——如何なる個人的の體驗からだかを誰が知つてゐよう？——十九世紀の哲學上悲觀主義を、宛かもそれが十八世紀に、ヒウムやカントやコンディヤックや官能派等の時代に特有であつたより以上に高い思想の力の、敢爲なる勇氣の、勝ち誇つた生命の豊富の徴候であつたかのやうに。乃ち私にまで悲壯的な物の見方は、私の文明の特有なる贅澤のやうに見えた——その最も貴重なる、最も高貴なる、最も危険なる浪費方法として、だがその富饒より觀れば、その許されたる贅澤として。同様に私は獨逸音楽を、獨逸魂の中なるディオニソスの強大の表白として解釋した。幾時代もの閉ぢ込められて來た原始力に、終に出口を與へる——他の場合文化と呼ばれてゐるやうな一切のものが、その爲め粉碎されてしまはうとも何の頓着なく——とこの地震を、私はそ

の中に聞くやうに思つた。明かにその場合私は、哲學上悲觀主義に於ても、並びに獨逸音樂に於ても、それらのものの本當の性格を成すところのものを——即ち、それらのものの浪漫主義を誤解してゐた。何が浪漫主義であるか？ 各の藝術は、各の哲學は成長するところの、鬭争するところの生に奉仕する治療手段及び救助手段と見做されてよい。それらのものは恒に苦患と苦患者とを假定してゐる。しかし乍ら苦患者には二通りがある。第一は生の過剰に苦患する者で、ディオニソスの藝術を欲望し、生に對する悲壯な見解及び洞察を要求する。第二は生の貧窮に苦患する者で、休息や安靜や穩かな海や藝術及び智識による自身からの釋放を求め、或は陶酔や癡學や昏迷や亂心やを求め、後者の二重の要望に應じてゐるのが、藝術及び智識に於ける總ての浪漫主義である。シ・オペンハウエル並びにワグネルも同じく然うだつた（また然うである）——あの頃私から誤解されてゐた（もつとも、これが彼等の損害にならなかつたことは、當然承認して貰へることであらう）あの最も知名なる最も顯著なる浪漫主義者を擧げて云ふならば、生の充實に於て最も豊富なる者は、ディオニソスの神及び人は、ただに恐るべきもの疑はしきものの光景を許容するだけでなく、恐るべき行爲その物をも、破壊や解體や否定の總ての贅澤をも許容する。彼にあつては、邪惡なもの馬鹿々々しいもの醜いものも、謂はば許可されてゐるやうに見える——各の沙漠を鬱葱たる果樹園にするやうな、生殖力繁殖力の餘剰の

結果として。反對に最も苦患してゐる者は、最も生命に貧しい者は、思想に於ても行動に於ても最も多く溫柔を平和を深切を要求したであらう。出來れば神を、特に病人の爲めの神を、『救主』を要求したであらう。同様にまた論理を、存在の概念的透明をも——なぜと云つて論理は落着きを與へ安心を與へるのだから——換言すれば、樂觀的な地平線内に或る溫かな、恐怖を追拂つてくれる空居を要求したであらう。斯くして私は漸くに、ディオニソスの悲觀主義者の反對なるエピクウル派を、同じくまた『基督教徒』を理解した。基督教徒は實際のところ一種のエピクウル派たるに過ぎない。そしてエピクウル派と同様本質的に浪漫主義者である。そして私の目は、多數の過ちが犯される場合の、あの最も面倒な最もすべからざる回顧的推斷の形に對して愈々鋭くなつた——回顧的推斷と云ふのは、作品から作者へ、行爲から行爲者へ、理想からそれを要する者へ、各の思考方法及び評價方法から其背後の指導的欲望への推斷である。總ての美的價値に關しては、私は今此根本的差別を用ふる。私は各の個々の場合に問ひたづねる、『此場合飢渴が創造的になつてゐるのか、それとも過剰が創造的になつてゐるのか？』と。初めの程は今一の差別が一層よささうなものに見えたかも知れない——それが、つと顯著である——乃ち、硬化に不朽化に對する、存在に對する願望が創造の原因であるか、それとも破壊に對する、變化に對する、新奇に對する、將來に對する、生成に對する願望がそれであるかといふことの着眼が、し

かし乍ら一層深く立ち入つて見れば、この二種類の願望は尙ほ曖昧なものとして證明される。しかも上記の、また私の見るところを以てすれば當然に撰び取られたる企圖によつてこそ分明するのである。破壊に對する、變化に對する、生成に對する願望は、范濫した未來を孕んだ力の表白であり得る（それに對する私の *Ferminus* は人々の知れる如く『ディオニソスの』と云ふ言葉である）。しかし乍らそれは又破壊する、破壊せずにはない（なぜならば存立してゐるものが、さうだ總ての存立してゐるものが、總ての存在自體が憤激させ興奮させるのだから）出來損つた者、窮乏した者、氣毒な者の憎しみでもあり得る。右の感動を理會する爲めには、我々の無政府主義者をよく見ればいい。不朽化への意志は同様に二重の解釋を要する。それは一方で感謝や愛から生ずることが出来る。斯うした起源を有する藝術は、いつも神化藝術であらう。恐らくルウベンスにあつてはディティラムピッシュで、ハアフィスにあつては幸福に嘲笑的で、ゲエテにあつては清明に溫雅で、そしてあらゆる事物の上にホメル的な光榮を撒きひろげながら（此場合私はアポロンの藝術を談つてゐるのである）。だがそれは又、ある苦患するところの、奮闘するところの、苛虐されたところの者のあの暴君的意志でもあり得る。その彼は最も個人的なもの、最も個別的なものを、彼の苦患の本當の好き嫌ひをも法規拘束として他に強ひようとする。總ての事物に彼の畫像を、彼の苛虐の畫像を印刷し、壓しつけ、

燒きつけて、謂はばそれらの事物に復讐する。後者は、シ。オベンハウエルの意志哲學にせよ、ワグネルの音樂にせよ、最も歴然たる形式に於ける浪漫的悲觀主義である。我々の文明の運命に於ける最終の大なる事件であるところの、浪漫的悲觀主義である。（尙ほ全く別な悲觀主義が、一の古典的悲觀主義がありさうだと云ふ豫感と幻覺とは、私から引き離しがたいものとして、私の *Proprium* 及び *ipsum* として私に屬する。ただ『古典的』なる言葉が私の耳に不快だといふことが、あまりに手摺れて居り、あまりに固つてく目立たなくなつて居るだけである。私はあの未來の悲觀主義を——なぜと云つて、それが來てゐるのだから——私はそれが來るのを見てゐるのだから——ディオニソスの悲觀主義と呼ぶ。）

## 三七二

我々不可解なもの。——我々は曾つて我々自らが誤解され、誤認され、混淆され、誹謗され、聞き違ひされ、聞き流しされることをこぼさなかつたか？ それこそは我々の運命である——おお、尙ほ久しい間に亘つて！ まあ、控目に云へば一九〇一年まで——それは又我々の榮譽でもある。我々は異つた事を願望したならば、我々自らに對して十分な尊敬を有たないであらう。人々は我々を他と混

滑する。其理由はと云ふと、我々自らは成長する。我々は絶えず變化する。我々は皮を脱ぎすてる。我々は春毎に殻をぬける。我々は愈々より若く、より未來的に、より高く、より強く成る。我々は愈しつかりした根を底に——惡に——下ろして行く。一方では同時に我々は天を愈々情深く愈々廣々とかき抱き、總ての我々の枝葉を以て愈々熱烈にその光を吸ひ込むのである。我々は樹木の如く生ひ立つ——それは總ての生命と同様理會するに困難である——一の場所にでなく、到處に、一の方向へでなく、上へも外へも、並びに内へも下へも。同時に我々の力は、幹や枝や根に出て來る。もはや我々には、個別的に何物をでも爲すべく、更に個別的な何物でもあるべく自由でない……かくの如きものは前に言つた通り我々の運命である。我々は高所に成長する。そしてそれが我々の宿命であつたとしても——我々は愈々電光に近く住んでゐるのだから——さうだ、我々は其爲めにそれに對する尊敬の念を少くしない。それは我々の他人と分ちたくない、他人に與へたくないものであり、高處の宿命、我々の宿命である……

三三二

何故に我々は理想家でないか。——従前哲學者等は官能に對する恐怖を有つてゐた。我々は事に依

つたら、此恐怖を餘りにも甚だしく忘れてしまつたものであらうか？ 我々は今日悉く皆官能派である。哲學に於ける現在の並びに將來の者の代表者なる我々は——理論からでなく、むしろ實際に於て、實地に於て。……これに反して、それらの従前の哲學者等は、官能によつて彼等の世界から、冷かな『觀念』の國から、危險なる南方の島へ誘ひ去られるやうに思つた。そして其處で、彼等の哲學者としての徳が日に當つた雪の融ける如く融け去ることを恐れたものである。『耳に蠟』は其時分殆んど哲學的思索の條件であつた。純粹な哲學者はもはや人生を聞かなかつた。人生が音樂である限りに於て、彼は人生の音樂を否定した。總ての音樂がシレエネの音樂であるといふのは、舊い哲學的迷信である。今我々は今日、正反對な具合に批判するやうに傾いてゐなければならなかつた（それ自體がやはり同様に間違つてゐたかも知れない）。即ち觀念が其冷かな貧血的外貌をもつてして、加之此外貌に係はりなしにでなく、官能より悪い誘惑者であるといふやうに。觀念は常に哲學者の『血』を糞にした。それは常に彼の官能を消耗させた。然り、人々が我々を信じようとするならば、彼の『心情』をも消耗させたのである。此等の舊い哲學者は心情を缺いてゐた。哲學的思索は常に一種の吸血事であつた。スピノザの如き人物に對してすらも汝等は、何等の深い謎語的なもの、氣味悪いものを感じないか？ 汝等は此處に演じられる芝居を、絶えずより蒼白になることを、愈々理想的に示される官能抽出を見

ないか？ 背景に何等かの久しくかくされてゐた吸血者——官能と共に發端をなし、最後に骨と骨とのかち合ふ音をのみ残すところの——を直感しないか？ 私の謂ふのは範疇や法式や言葉のことだ（なげならば、無遠慮に言ふと、スピノザのものであつて残存してゐるもの、amor intellectualis dei は、がらがらと鳴る音であり、それ以上のものでない！ 血の滴の悉くがなくなつてゐるならば、何が Amor であるか、何が *tenor* であるか？……）要するに、あらゆる哲學上理想主義はこれまで病氣のやうな或物であつた——それがプラトオの場合に於ける如く、豊饒にして危険なる健康の用心でなく、強大過ぎる官能に對する恐怖でなく、賢いソクラテス派の賢さでなかつた場合。思ふに我々近代人がプラトオの理想主義を要するほどに健康でないといふだけの事であらうか？ そして我々は官能を恐れない。なぜならば——

二七三

先入見としての『科學』。——階級差別の理法から生じて來ることとして、學者等は理智的中流階級に屬してゐる限りに於て、本當の大きな問題や疑問記號を、目に入れることすらも出來かねる。加之、彼等の勇氣が、同じく彼等の眼力がそこまで届かない。特に彼等を研究者にするところの彼等の欲望

や、物がかくかく斯様に造られてゐよかしくと云ふ彼等の内的な期待及び願望や、彼等の恐怖及び希望やは、あまりにも速く鎮靜させられ満足させられた。例へばかの衝動的な英吉利人ヘアバート・スペンサアをして、彼一流の熱狂に走らしめ、希望の一條線を、願はしさの地平線を引かしめるところのもの、即ち彼の夢想せる『利己主義及び利他主義』のあの終局の和解なるものは、我々の如き人間をして殆んど嘔吐を催さしめる。最終のバースペクティヴの如きスペンサアの如きバースペクティヴをもつた人間性は、我々にまで輕蔑を減却を値してゐるやうに見える！ しかし乍ら、他の人から單にいやな可能性と見做されたる、また見做されていい或物が、最高の希望として彼から感得されねばならぬといふのは、スペンサアが先見し得なかつたところの疑問記號である……これは丁度、今日左様に多くの唯物主義的自然科學者が満足してゐるところのあの信仰と同じである。人間の思考の中に、人間の價値概念の中に其等價物及び尺度を有つてゐる筈の——の世界に對する信仰と同じである。我々が我々の四圍な小さい人間の理性の助けを藉りて竟に到達し得たところの『眞實の世界』に對する信仰と同じである！ 如何に？ 我々は實際そんな具合に、生存を數學者の爲めの運算にまでをとめてしまふことを欲ふか？ 我々は特に生存から其多義なる性格を剝奪することを欲しない。それを、我か紳士諸君、善き趣味が、諸君の地平を越えて行く一切のものに對する畏敬の趣味が要求する！ 依つて以

て諸君が其地位を支持するところの、依つて以て研究や仕事が諸君の官能の中に科學的に（諸君は實際には器械的にのつもりでゐるのだらうか？）爲されて行くことの出来る一の世界解釋が、數へたり計量したり秤定したり見たり握つたりを承認し、それ以上を承認しないやうな世界解釋が、ただそれだけが正當なものであるといふ考は、それが氣違ひか馬鹿かでないとしたら、がさつとおめでたさである。反對な事が、即ち生存の最も皮相的なもの最も外面的なもの——其最も外見的なもの、其外皮及び體化——が最も先づ捕捉されるといふ事が、極めてありさうな事ではなかつたか？、加之、恐らくは單にそれだけが捕捉されるといふことが！ 従つて、諸君の理解する如き『科學的』な世界解釋は、やはり最も愚劣なものの一であり得た。換言すればあらゆる世界解釋の中最も意義に乏しいものであり得た。これを私は私の友人なる器械學者等の耳と本心と言ふ。彼等は今日好んで哲學者等と仲善くし、器械學が最初の且つ最終の理法——その上に總ての生存が、土臺の上に築かれるごとく築かれねばならぬ——の教であるといふことを、信じ切つてゐる。しかし乍ら本質的に器械的な世界は、本質的に無意義な世界であらう！ 我々にして若し、音樂の如何に多量が數へられ計量され法式化され得るかに依つて、音樂の價値を評價したならば、此の如き『科學的な』音樂の評價が如何に不條理なものであつたらうよ！ 何を人々はそれから會得し、理解し、認識したことであらう！ 何物をも、本當にそ

れに於て『音樂』であるところの物の、正しく何物をも！……

## 三七四

我々の新しき『無限なもの』。——生存の遠景的性格がどこまで届くか、又はそれが全然別な一の性格を有するかどうか、説明のない、『意義』のない生存が『馬鹿げたもの』にならないかどうか、他方では總ての生存が本質的に説明するところの生存でないかどうか——此等の問題は當然なものであると共に、理智の最も勤勉なる嚴密に本心的な分析や自己吟味によつても解決され得ない。なぜと云つて此分析に際して人間の理智は、その遠景的形式の中に、又その中のみ自らを見ることを避け得ないからである。我々は我々の片隅の周囲を見まわすことが出来ない。尙ほ如何なる別の種類の理智及び遠望があり得たかを知らうとするのは、望みなき好奇の心である。例へば何等かのものが時代を溯つて、或は進んだり溯つたりして感得し得るかどうかを（依つて以て人生の別な方向が、そして因果の別な概念が與へられるであらう）。しかし乍ら思ふに、我々は今日少くとも我々の片隅から號令すると云ふ滑稽な無作法に遠ざかつて居り、また此片隅からのみ正當に遠望され得るのである。寧ろ世界は我々にまで今一度『無限なもの』になつてゐる——それに無限な解釋を抱括してゐるといふ可能性を、

我々が拒否しない限りに於て。今一度大なる恐怖が我々を掴む。けれども、知られざる世界の此怪物を昔風に直ぐに今一度神化すべく誰が欲ふか？　そして事に依つたらば、知られざる物を『知られざる人物』として行々禮拜すべく！　ああ、此知られざるものの中には、餘りに多くの非神<sup>フシ</sup>的<sup>テク</sup>な解釋の可能性が餘りに多くの解釋の極悪や魯鈍や愚劣が包容されてゐる。——我々の知つてゐる我々自らの人間的な、餘りに人間的な自己が……

## 三七五

何故我々はエビクウル派のやうに見えるか。——我々は、我々近代人は最終の信念に對して用心深い。我々の不信任は各の強い信仰に、各の無條件な然りや否やに横るところの蠱惑や本心の欺瞞を待ち構へてゐる。如何にしてこれが説明されるか！　思ふに、人は其の中に夥しく、『焼かれた子供』の、幻滅した理想主義者の用心を見るであらう。だが他方、それよりも以上に、従前の立ちんぼう——その立ちんぼうは隅つこの方に小さくなつてゐることによつて絶望してゐたのだが、今や隅つこの反對なものに、無際限なものに、"Fashion as a whole" に耽樂してゐる——の悦ばしげな好奇心をも見るであらう。かくして、事物の疑はしき性格をたやすく見逃かしてしまはない、殆んどエビクウル派的な認識の嗜

好が發達する。同様に壯大な道德的言辭や態度に對する反感が發達する。總ての粗野な岩疊な對偶を拒否し、その慣習的な控目を誇らはしく意識するところの趣味が發達する。なぜと云つて、これが我々の誇を形作るのだから——確實性へ向つての我々の奔騰的な衝動の、斯うしたお手輕な緊縛が——最も暴烈な騎乗者の斯うした自制が。乃ち今も昔も我々は、狂暴な獸の上に跨つてゐる。そして我々が躊躇するならば、我々を躊躇させるのは、恐らく危険といふことでなくして他の物であつたらう。

## 三七六

我々の緩漫な時代。——斯く總ての藝術家は、『作品』をもつた人々は、母親的種屬の人間は感ずる。生涯の各の章に於て——一の作品は常に生涯の一の章をなすのである——常に彼等は、標的其物に到着してゐるやうに思ふ。常に彼等は甘んじて死を迎へたであらう——『我々はそれに對して熟してゐる』といふ感情を以て。これは疲労の表白ではない。寧ろ常に作品自體が、ある作品の圓熟が其作者の中に残すところの或る秋らしき日當り好さと穩さとの表白である。其時生涯のテムボオは緩漫になり、濃厚に蜜汁のやうになる——長い斷音へ來るまで、あの長い斷音に對する信仰へ來るまで。

三十三

我等郷國なきもの。——今日歐羅巴人の間には、敬重の意味に於て自らを郷國なきものと呼ぶべき権利を有するものが缺けてゐない。私の祕密の叡智と *Gaia scientia* とは彼等の胸にこそ疊まれてあれ！ なぜと云つて、彼等の運命は酷く、彼等の希望はふたしかであり、彼等の爲めに慰藉を工夫してやるのは一の手品である。しかしながら、それが何の役に立つ！ 我々將來の兒は、如何にして我々は此現在に寛いでゐられたぞ！ 我々は、此脆い打壞された過渡時代に於て尙ほ且つ寛いだ心持にならせるところの、すべての理想を氣に入らないのである。そして其『現實』に關して云へば、我々は其の持續を信じないのである。今日尙ほ我々を運んでゐる氷は、既に甚だ薄くなつてゐる。融風が吹いてゐる。我々自らが、我々郷國なきものが、氷や其他の餘りに薄き『現實』を打破るところの或物である……我々は何物をも『保守し』ない。我々は如何なる過去へも引き返したくない。我々は全く『寛容』でない。我々は『進歩』の爲めに働かない。我々は先づ市場の將來のシレネンに對して耳を塞ぐことを要しない。彼女等の歌ふ、『平等の権利』や、『自由な社會』や、『最早主人もなく奴隷もなく』やは、我々を誘惑しないのである！ 全くのところ我々は、正義と平和との國が地上に築

かれることを願はしいと思はない（なぜならば、如何なる事情の下に於てもそれは、最もひどい妥協と支那主義との國であるだらうから）。我々是我々の如く危険を、戦を、冒險を愛するところの人々、苟合したり囚になつたり妥協したり萎縮したりしないところの總ての人々を悦ぶ。我々是我々自らを征服者の中に數へる。我々は新しい秩序に就いて、一の新しい奴隷制度に就いてすらも省察する。なぜと云つて、『人間』といふ類型の各の強化と高化とは、一の新しい奴隷制度がまた必要であるから。太陽がこれまでに見た、最も人間的な最も溫和な最も正しい時代と呼ぶべき名譽を要求したがるやうな一の時代にあつて、斯うした總ての物を以てして、尙ほ且つ我々が寛げないといふのは明白な事ではないか？ 我々が丁度この立派な言葉を口にする場合愈々醜い反面の思想をもつといふのは、随分情けない事である！ 我々が其内に唯だ、深い弱他の、疲労の、老齡の、衰退し行く力の表白のみ、又は假面をのみ見るといふのは！ 如何なる金銀箔を以て病人がその弱さを飾るかは、我々にまで何の影響を及ぼし得るものぞ！ 彼は其弱さを其徳として誇示するかも知れない。全くのところ、弱さが溫和に、嗚呼あんなにも溫和にし、あんなにも正しくし、あんなにも癪に障らなくし、あんなにも『人間的に』するといふのは、何等の疑を容れない事だ！ 人々が我々へ説得したがつた『同情の宗教』——おお、我々は今日丁度此宗教を被覆や裝飾として要するところのヒステリイ的な小男子



小婦人をかなりよく知つてゐる！ 我々は如何なる人道主義者でもない。我々是我々の『人類に對する愛』を口にすべく自らに許すことを敢てせぬであらう。それを爲すべく我々の如き型の人間は、十分に俳優でない！ 或は十分にサン・シモン派でなく、十分に佛蘭西人でない。人は好色的多感性及び戀愛的焦燥のゴオル的過度病に感染したに違ひない——正直にでも其情熱をもつて人類に近づく爲めには……人類に！ あらゆる年寄りの女の中でも、これより以上に忌まはしき老女があつたか？（——それが『真理』でもなかつたなら。哲學者等にとつての一問題である）。さうだ、我々は人類を愛しない。だが他方では我々は、今日流行してゐるやうな意味合で、全く十分に『獨逸的』でない——國家主義や人種的憎惡を辯護する爲めに、國民的興奮や中毒を享樂し得る爲めに（さうした事の故に今日歐羅巴に於て、國民が國民から檢疫に依つての如く交通を遮斷されてゐるのだ）。それに對しては我々は餘りに囚はれてゐな過ぎる。意地悪過ぎる。我儘過ぎる。又餘りに事情に明る過ぎ、あまりに『世間師になり』過ぎてゐる。我々はかけ離れて、『季節はづれに』過去の又は將來の世紀に於て、山上に住することを遙かに選ぶ——單に、ある政策（獨逸精神を荒涼たるものにしつつも、それを浮誇にするところの、その上小さな政策であるところの）の目撃者として、我々自らへ加へらるべきことを知つてゐる無言の憤激の刑を免れる爲めばかりにでも。この政策にとつては、それ自らの創造物が直に

再び壞崩しない爲めに、それを二の致命的憎惡の間に樹立することを必要としないか？ それが歐羅巴の小國家制度の永久化を欲しないではないか？……我々郷國なきものは『近代人』として人種上系譜上餘りに多様であり餘りに混淆してゐる。従つて今日獨逸に於て獨逸的情操の徵證として誇示されるところの、又『歴史的感念』ある人々に於て二重に間違つたふさはしくないものとして感じられるところのあの、ごまかしの人種的自己嘆賞及びふしだらに參與する氣にならないのである。一言にして云へば——そしてそれが我々の名譽を賭けての言であらねばならぬ！——我々は善き歐羅巴人である。歐羅巴人の相續人である。富んだ、溜まり過ぎた、けれども又どつさり義務を負はされた、幾千年に亘る歐州精神の相續人である。此の如きものとして我々はまた基督教を卒業してしまひ、いやになつてゐる。しかも丁度、我々が基督教から出て來たものである故に、我々の祖先が基督教の忌憚なき正直さをもつた基督教徒——彼等の信仰の爲めには財産をも、生命をも、地位をも祖國をもよろこんで犠牲にしたところの——であつた故に。我々は——同様の事をする。だが何の爲めに？ 我の不信仰の爲めにか？ あらゆる種類の不信仰の爲めに！ 否、我が友よ、汝等はより善く知つてゐる！ 汝等の内に匿されたる肯定は、汝等が汝等の時代と共に病んでゐるところの總ての否定や「恐らくは」よりも有力である。そして汝等が海上へ出て行かねばならぬとき、汝等移住者よ、かく汝等

をそれを驅り立てるのは——一の信仰である！……

三七八

『そして再び明るくなる』。——我々物惜みせぬもの、心の富めるものは、開いた泉の如くにして街路の傍に立つて居り、何人が我々から呑むことをも拒まない。我々は殘念乍ら、拒まうと思つても拒むことを知らない。我々は人がかき濁らせ暗くするのを、何物によつても妨げることは出来ない。我々の住んでゐる時代が其『最も時宜に適したもの』を投げ込むのを、その不潔な鳥が汚物を、子供等が其がらくた物を、そして疲れ切つた我々の側に休息してゐる漂泊者が其大きな小さな慘苦を我々の中へ投げ込むのを妨げることは出来ない。けれども我々は、我々の常に爲して來た通りに爲すであらう。我々は人々が我々の中へ投げ込むほどの如何なる物をも、我々の深みへ取り入れる——なぜと云つて我々は深く、我々は忘れない——そして再び明るくなる……

三七九

痴人の中言。この書物を書いたのは、決して人間嫌ひの人間でない。人間の憎悪は今日餘りに高價

である。昔の人間が人間を憎んだやうに、ティモオン風に、全然、手加減なしに、眞心から、憎しみの愛全體から憎む爲めには、その爲めには人は、輕蔑のあきらめをしなければならなかつたであらう。そして如何に多くの精練された悦びを、如何に多くの忍耐を、如何に多くの恩澤をすらも、我々が我々の輕蔑に負ふてゐるかよ！ 加之、我々は其爲めに『神の選びたまへるもの』である。精練された輕蔑は我々の趣味であり特權である。我々の藝術である。恐らくは我々の徳である——近代人の間に最も近代的である我々の！……これに對して憎悪は平等にする。對立させる。憎悪の中に名譽がある。最後に、憎悪の中に恐怖が、夥しき恐怖がある。けれども我々恐怖を知らぬ者は、我々此時期のより理智的な人間は、此時代に對してより理智的な人間として恐怖なしに生きることを爲め、十分善く我々の利便を知つてゐる。人々はたやすく我々を刎ねたり、閉ぢ込めたり、追放したりせぬであらう。我々の書物を禁制したり燒棄したりさへせぬであらう。時代は理智を愛する。それは我々を愛する。そして我々が次ぎのことを時代へ知らせねばならなかつた時にすらも、時代は我々を必要とする。曰く、我々が輕蔑に於て藝術家であるといふこと、人々との如何なる交際もが我々にまで輕易なる戰慄であるといふこと、我々があらゆる我々の溫柔や忍耐や親愛や懇懃やを以てして、ある人間の近接に對する我々の鼻の先入見を去るべく、我々の鼻に説得し得ないといふこと、我々が自然を愛すれば愛

するほど、人間的な事物が愈々より少く自然の中になされるといふこと、そして藝術が人間からの藝術家の逃避であり、或は人間に對する藝術家の嘲笑であり、或は自分自身に對する藝術家の嘲笑であるとき、我々が藝術を愛するといふことを……

## 三八〇

『漂遊者』は語る。——苟くも我々の歐洲道德を遠方から一瞥する爲めには、それを他の従前の又は將來の道德と比較する爲めには、人はある都市の塔の高さを知らうとする漂遊者のなす如くなさねばならぬ、その爲めに漂遊者は都市を去るのである。『道德上先入見に關する思想』は、それが先入見に關する先入見であつてならぬものならば、道德の外側に一の地位を假定する。人の登つたり、攀ぢたり飛んだりして行かねばならぬ善惡の彼岸のやうなものを。そして一定の場合にはいつでも、我々の善惡の彼岸である。我々の血肉には入り込んだ嚴然たる價值批判の總計として理解されたる、すべての『歐羅巴』からの解放である。抑も人が外側へ、又は上方へ出て行くと欲するのは、恐らく一の小さな狂暴である。一の奇異なる非理性的な『汝はねばならぬ』である。なぜと云つて我々認識者も『不自由な意志』の我々の好き嫌ひをもつてゐるのだから。問題は、人が實際そこへ登り得るかである。

それは色々な條件に倚賴するかも知れない。主としてはそれは、我々が如何に軽いか又は如何に重いかの問題である。我々の『特殊な重み』の問題である。人は甚だ軽くあらねばならぬ——彼の認識への意志を此の如き遠方にまで、そして謂はねば彼の時代の向ふまで逐ひやる爲めに、幾千年の觀望に對する目を創造する爲め、並びに此等の目の中に清純なる天を創造する爲め！我々今日の歐羅巴人を壓迫し、阻止し、拘束するところの多くのものから、人は釋放されねばならなかつた。時代の最上の價值標準を目標しようとさへするところの、此の如き『彼岸』の人物は何よりも先づ、自分自身の中に此時代を『克服』しなければならぬ——それは彼の力の吟味である——従つて彼の時代をのみならず、此時代に對する彼のこれまでの反感や反對をも、此時代から來る彼の苦患をも、彼の反時代性をも、彼の浪漫主義をも……『克服』しなければならないのである。

## 三八一

可解性の問題。——人は物を書く時、單に理解されることをのみならず、——又同様に確實に理解されないことも慾望する、誰かがある書物を理解すべからざるものに見出すときも、尙ほ且つそれは其書物に對する何等の非難でもない。事によつたらそれは恰も其著者の意圖に屬してゐたであらう。

彼は『誰からも』理解されることを慾望しなかつたのである。總ての高貴なる精神及び趣味は、それが自らを告げ知らさうと欲するとき、其聽手を撰擇する。それを撰擇するに除して彼は、同時に『他の者共』に對して障壁をめぐらすのである。文體の總ての精緻なる法則はそこに其起源を有つてゐる。同時にそれは遠かつてゐる。それは距離を造る。それは前述の如く『はいる』ことを、理解することを防止する。一方ではそれは、我々と耳を同じうする人々の耳を開く。そして我々自らの間に於て、且つ我々の場合に於て云ふならば、私の友人よ、私は私の無智に依つても、私の活潑な氣質によつても、汝等にまで理解されるのを妨げたくない、如何に活潑さ加減が兎に角一の事物へ到達する爲め、速くそれへ到達すべく私を強いようとも。なぜと云つて私は、深刻な問題を扱ふに、冷水浴を扱ふやうに——速くはいつて速く出る——するのだから。人がそれで以て奥底へはいらない、人が十分深く下らないといふのは、恐水病者の、冷水の敵の迷信である。彼等は經驗なしに語つてゐるのである。おお！大なる冷たさは速くする！そして序でながら私はたづねて見よう。實際に一の事物はそれが迫りすぎりに觸られたり、瞥見されたり、閃視されたりした丈けだといふので、誤解されたり認識され損つたりしてゐるか？人は全く先づその事物の上に坐り込んで見なければならぬか？卵をかへすやうにしなければならぬか？ニウトンが彼自らについて言つた如く、*Diu nocturne incubando*（晝も

夜もそれをあたまめて）少くともそこには特殊のきまり悪さ、揶揄つたさをもつた眞實がある——それを人は突然にのほか捕捉し得ない。それを人は不意撃によつてつかまへるか、或はその儘にして置くかでなければならぬ。……最後に私の簡潔は尙ほ今一の價值をもつてゐる。私のたづさはつてゐる如き問題に關しては、私は多くの事を簡潔に言はなければならぬ——それが更により簡潔に聞かれることの爲め。乃ち人は不道德家として、無邪氣を減ぼさないやうに氣をつけなければならぬ。といふのは、生活から其無邪氣のほか何物をも獲ない驢馬や兩性の老處女を意味してゐる。更に私の述作は彼等を德へインスパイアし押し上げ奨め勵ますつもりのものである。地上に於て私は、徳の甘い感情によつて動かされる。熱狂した老驢馬や處女を見るより、以上に面白い何物をも知らなかつたであらう。そして『それを私は見た』かくツラトストラは語つた。簡潔に關してはこれだけにして置く。私の無智については事態がより悪い。私の無智を私は私自らに隠蔽しない。私自らそれを恥ぢる時もある。勿論同様に。私が此恥を恥ぢる時もある。恐らく我々哲學者は何れも皆今日智識に關して都合悪く置かれてゐる。科學は成長して行く。我々の中の最も學殖ある者も、彼等があまりに僅かを知つてゐることを發見しようとしてゐる。しかし乍ら、それが然うでなかつたなら、更により悪しかつたであらう——我々が餘りに多く知り過ぎてゐたならば。我々の任務は何よりも先づ、我々自らを混淆

しないやうにすることである。そしていつまでもさうである。我々は學者と異つた或るものである。——我々も又他の連中の間では學者であるといふことを拒否出来ないのだけれど。我々は別の需要を、別の成長を、別の消化をもつてゐる。我はより多くを要する。我々は又より少くを要する。一の理智が其營養として如何に多くを要するか、それに對しては如何なる方式もない。しかし乍ら若しもその趣味が獨立不羈へ、急速な往來へ、漂遊へ向けられるならば、事によつたら、ただ最も神速な者のみが適應してゐるやうな冒險へ向けられるならば、それは不自由に秘結してゐるよりも、寧ろ貧しい賄で自由に生活する方を撰んだであらう。肥滿でなく、寧ろ最大のしなやかさ及び力こそ、善き舞踏家はその營養として欲望するところのものである。そして私は、ある哲學者の精神が善き舞踏家であるより以上に何物であるべく願つたかを知らないのである。乃ち舞踏は彼の理想である。又彼の藝術である。最後には又彼のたつた一つの信心、彼の『祭祀』である……

三八二

大なる健康。——我々新しきもの、無名のもの、理解されにくきものは、我々尙ほ證明されぬ將來の初兒は——我々は一の新しき目的に對してまた一の新しき手段を要求する。即ちこれまでの如何な

る健康よりも、より強き、より鋭い、より強靱な、より大膽な、より快活な一の新しき健康を要求する。これまで價值及び願はしさの全範圍を経験し、此理想的『地中海』の全海岸を廻航したことを、魂の中に渴望するところの人は、征服者たり理想の發見者たるものがどんな氣持のものであるか、同様藝術たり、聖者たり、立法者たり、賢人たり、學者たり、信心者たり、豫言者たり、舊式の非國教徒たるものがどんな氣持のものであるかを、その最も個人的な經驗の冒險から知らうと欲するところの人は、その人は其目的に對して何よりも先づ一の物を、大なる健康を要する。人がただに所有するのみならず、又絶えず獲得する、獲得せねばならないやうな——なぜと云つて人は幾度も幾度もそれを犠牲にする、せねばならないのだから……そして今、我々理想の探求者が、恐らくは剛巧なよりも勇猛に、又随分屢々破船してへこたれながら、前述の通り人々の認容したがつたより以上に健康に、危険らしく健康に、いく度も健康に、道中を久しくそんな具合にしてゐた後、それは我々にまで、それに對する報酬として我々が一の尙ほ發見されない國を我々自らの前に有するかのやうに見えるであらう。其境界をまだ何人も見ず、あらゆる從來の理想の國々隅々の彼岸を、美しきもの見知らぬもの疑はしきもの恐るべきもの神的なものにああまで豊富な一の世界を有するかのやうに見えるであらう。我々の好奇心が我々の所有慾同様に自分自身から脱線してゐるほど——ああ、我が今や最早何物

によつても満足させられないほど！ 如何にして我々は、此の如き遠望のあと、又此の如き本心及び意識への熱望を以てして、尙ほ且つ現在<sup>の</sup>人間に満足し得たか？ なかなか厄介な事である。けれども、我々が今日の人間の最も貴重なる標的及び希望を、單に悪しく保存されたる眞面目さで以て見やり、また恐らくは最早見やらないであらうことは避けがたいのである。今一の理想が我々の前を走り動く。一の奇異なる誘惑力をもつた、危険に充ちみちた理想で、我々は何人をもそれへ説明したくなかつた。なぜならば我々は、何人の上にもそれほど容易にそれへの権利を承認しないから。これまで神聖なもの善良なもの犯しがたきもの神的なものと云はれてゐたところ一切を、ナイイフに（換言すれば意欲せずに、范溢せる豊饒と強力とから）弄ぶところの一の精神の理想である。その精神に對しては、民衆が依つて以て正當に其價值標準を作るところの最高概念は、既に危険や墮崩や低下だけ、又は少くとも保養や盲目や一時的の自己忘却だけそれだけ多くを意味するであらう。人間的に超人間的な福祉及び厚情の理想。それは随分屢々非人間的に現れるであらう——例へばこれまでの地上の眞面目さ全體の側へ、又身振や言葉や音調や目付きや道徳や仕事に於けるあらゆる種類の嚴肅さの側へ、其最現身的な不隨意的なパロディとして置かれた時に。又それにも係はらず、それと共に恐らくはあの大なる眞面目さがはじめてはじまり、本當の疑問記號がはじめて置かれ、魂の運命が向きを變へ、

時計が動き、悲劇がはじまる……

三八三

エビロオグ。——しかし乍ら、私が此陰暗なる疑問記號をゆるゆると塗り上げて来て、尙ほ且つ私の讀者等へ正しい讀方の徳を——如何なる忘られたる又知られざる徳であることぞ！——思ひ起させようとしてゐるとき、私の周圍には最も意地悪き最も快活な最もいたづら好きな笑ひが聞えて来る。私の書物の精神それ自らが私に飛びかかり、私の耳を引張り、私をおとなしくさせようとする。『我々もはや我慢が出来ないと彼等は私に向つて叫ぶ、『よせよ、此眞黒な音楽をよせよ。我々の周圍は明るい午前ではないか？』そして緑の柔らかな土地と草原とで、舞踏の國ではないか？ 面白くすべく會つてより善き時があつたか？ 誰が我々に歌をうたつてくれるか？ 午前の歌を、左様に日當りよき、左様に輕き、左様に羽の生えた歌を——氣むづかし尾を逐ひ拂はないで、むしろ一緒に歌ひ且つ一緒に踊るべく彼等を招きよせるほど。そして一の單純な田舎くさい風笛の方がむしろよい——あんな神祕な音より、あんな蝦蟆<sup>ひき</sup>の叫び、墓の聲並びにモルモットの笛聲などよりも！ それで以て汝は、汝の野に於てこれまで我々を樂ましてくれたのである、隱退者將來の音楽者君よ！ 否あんな音でなく！

寧ろ我々をしてより愉快なより悦ばしき物を奏せしめよ！』汝等はさうしたのであるか、私の氣短かなる友達よ？ よろしい！ 誰が汝等の願ひに同意しなかつたであらうぞ？ 私の風笛は既に待ち構へてゐる。私の咽喉もまた——それは少しく哽れるかも知れないが、でもまあ、我慢をしてくれ！我々は山上にゐるのだから。しかし乍ら、汝等が聞くところのものは、少くとも新しい。そして汝等がそれを理解しなくとも、汝等が歌唱者を誤解しようとも、それが何であらう！ それこそ『歌唱者の呪咀』なのだ（譯者註——ウウランドの有名な詩の標定）。汝等が彼の音楽や諧調を明瞭に聞き分ければ聞き分けるほど、愈々より善く彼の笛に合はして舞踏することが出来る。汝等はそれをしたいと願ふか？……

## 附 録

## 放浪公子の歌

ゲエテに

不朽なものは  
お前の象徴だけである！  
老猾なものの神様は  
詩人の誤魔化しものである。  
回轉するもの世界の車輪は  
目的の上に目的をかぶせる。  
困厄——と憤怒する者は稱し、  
痴人は稱する——遊戯であると、  
支配するもの世界の遊戯は  
存在と假象とを混合する。  
永久に愚かなものは

我々を混合する——してしまふ！

詩人の召命

私が此程休養すべく  
暗き樹木の上に坐つてゐたとき、  
ちくたくを、軽いちくたくを私は聞いた  
——うまく拍節と律動とを有つたのを。  
不機嫌になつて、私はしかみつつらをした。  
けれども終には我を折つて、  
それこそ丁度詩人のやうに  
自分自身、さくたくに合はして物言つた。



かくの如く詩作に於て一字一字  
鳥が私を追うて跳びはねたとき、  
私は不意に四分の一時を  
笑はなければ、笑はなければならなかつた。  
お前は詩人か？ お前は詩人か？  
お前の頭はそんなにも悪いのか？  
『然り、我が紳士よ、汝は詩人である』と、  
啄木鳥は肩を聳かす。

この叢に私は何を待つてゐる！  
盗賊の私は誰に待伏してゐる？  
それは格言か？ 比喩なのか？  
嗤嗟の間に私の韻律はそれへ飛び掛かる。  
苟くも滑走し跳躍するほどの物ならば、

詩人は直に詩に編み入れる。

『然り、我が紳士よ、汝は詩人である』と、  
啄木鳥は肩を聳かす。

思ふに、韻律は箭の如きか？  
如何にそれが跳き、震へ、跳びはねるかよ——  
蜥蜴屬の高貴なる部分へ  
其箭がぶつりと刺さるとき！  
嗚呼、汝等はそれに死ぬ、あはれな奴よ、  
でなければ、酩酊したやうによろける！  
『然り、我が紳士よ、汝は詩人である』と、  
啄木鳥は肩を聳かす。

急速ないびつの文句や、

酔拂つた言葉や、如何に押し合ひへし合ふよ！  
各行みな悉く

ちくたくの鎖をなして垂れるまで。

偕てそこにはこれを悦樂する。

残念な種族があるか？ 詩人は好悪か？

『然り、我が紳士よ、汝は詩人である』と、

啄木鳥は肩を聳かす。

鳥よ、汝は輕蔑するか？ からかふのか？

私の頭はもう悪いのか？

私の胸は一層悪いのか？

恐れよ、私の憤怒を恐れよ！

しかし詩人は——憤怒の中にすら、

尙ほ悪しく且つ正しく詩語を編む。

『然り、我が紳士よ、汝は詩人である』と、  
啄木鳥は肩を聳かす。

### 南方にて

斯く私は曲りくねつた枝にぶら下り、

私の疲勞を揺り息ませる。

一羽の鳥が私を御客に招待した。

私のとまつてゐるのは鳥の巢だ。

だが何處に私はゐる？ 嗚呼遠いかな遠いかな！

白い大海は眠つて居り、

その上に深紅の帆が一つ立つて居る。

岩石や、無花果の樹や、塔や、港や、  
周囲の牧歌や、羊の啼聲なげきや——  
南方の無邪氣が私を受け入れる！

一步一步は——生活でない。

獨逸式の牛の歩みは我慢が出来ない。

私は風に私自身を持ち上げさせた。

鳥と一緒に舞ひあがり、

海を越えて南へ飛んだ。

理性よ？ 忌々いやしくしき仕事よ！

それはあまりに早く目的へ連れて行く！

飛翔の中に私は、何か私を愚弄したかを知った。

既に私は新しき生活への、

新しき遊戯への勇氣を、血を、汗液を感得する。

孤獨に考へるのは賢いと云へやうか、

孤獨に歌ふのは愚劣であらう！

されば汝等を讚美の唄うたを聞きながら、

靜かに私の周圍に輪を作れ、

悪しき小鳥よ、輪を作れ！

そんなにも若く、そんなにも本當でなく、そんなにも浮づいて、

汝等は全く愛に、各の美しき娛樂に

似つかはしく出来てゐるやうだ！

北方にて——私は躊躇し乍ら告白する——氣味悪きまで年寄つた一人の女を私は愛した。  
其老婦は『眞實』と云はれてゐる………

敬虔なるベツパ

私の體が美しい間は、

信心深くすることの甲斐がある。

君達も知つてゐる通り、神様は女を好きだ。

其上に美しい女が好きだ。

彼は可哀相な若僧を

きつと悦んで赦すであらう——

多くの若僧共と同様に

私の側そばにゐたがるのを。

如何なる白髮の牧師でもなく！

寧ろ、尙ほ若き、屢々頬赤き、  
屢々甚だしき宿酔のときすらも、  
嫉妬と苦患ウレシとに充ちたるをこそ  
私は白き髯を愛しない。  
彼は老人を愛しない。  
如何に驚くべく又賢く  
神がこれを定めしよ！

教會は生きかたを心得てゐる。  
そして心と顔とを吟味する。  
教會はいつでも私を赦す——  
否、誰が私を赦さぬだらう！  
私は舌たるく物を言ひ、  
跪坐し禮拜して出て行く。

そして新しき罪惡を以て  
舊き罪惡を拭ひ消す。

地上の神は讚美されてあれ——  
美しき少女を愛する、  
そして然うした過ちを  
悦んで自分自身に赦すところの神は、  
私の體が美しい間は、  
信心深くすることの甲斐がある。  
皺くちやの老婦とならば、  
惡魔よ私に言ひ寄れかし！

神祕の小舟。

昨夜、すべての物が眠つて、  
ふたしかな太息の風も  
街の通りに次き落ちたとき、  
枕が私に安息を與なかつた。  
罌粟もまた、そのほかの  
深く眠らす物も善き良心を與へなかつた。

遂に眠ることを思ひ断ち、  
私は渚へ出て行つた。  
柔かな、明るい日光を浴びて、  
温かい砂の上に眠さうな人と舟とを、  
羊飼ひと羊とのやうに見出した私は、

眠さうに其舟を水へ推し出した。

一時間も、事によつたら二時間も、  
乃至は一年も経つたであらうか？  
忽ち私の官能と思想とが、  
永久の無關心へ沈んでしまつた。  
そして底知れぬ深潭が  
口を開いた——と思へば消え去つた！

朝が來た。黒い水の上に

小舟は安らかに浮いてゐる……  
如何したのだ？ と各人が呼ぶ。  
何があつた？ 血があつたか？ と——  
如何もせぬ！ 我等は眠つた、

一同は——嗚呼、ぐつすりねてゐた！

### 愛情の打ち明け。

(だが其間に詩人は穴へ落ちた——)。

おお驚きよ！ 彼は尙ほ飛ぶか？  
彼は其翼を休めないから登上するか？  
抑も何物か彼を持ち上げ支へるぞ？  
今彼の標的は、進路は、並びに手綱は何物ぞ？

星辰と永劫の時との如く彼は今、  
生命の逃げたる高處に生く

——嫉妬をすらも憐憫しつつ。  
彼の浮搖を見るさへも、かなりの高さにあることを要した！  
おお、アルバトロオスの大鳥よ！  
不斷の衝動を以て私を追ひ上げる！  
私はお前の事を考へた。其時涙が  
留途もなく流れた——然うだ私はお前を愛する！

### テオクリイト的牧羊者の歌

内臓を病つて、私は此處に横る——  
蟲共が私に寄生して。  
そして光と喧騒とが攪亂する！  
私は彼等の舞踏するのを聞く………

彼女は丁度此時刻に

私の處へ忍んで來ようと云つてゐた。

私は犬のやうに待つてゐた——

しかるに何の徴候も見えぬ。

彼女は十字架を割つて約束した！

どうして彼女が欺き得るぞ！

——それとも彼女は私の山羊の如く

各の人の後を追ふのか？

ああ、私の誇よ、

お前の絹の上衣は何處からか？

此木にはまだ多くの山羊が、

淫縦な獸が住んでゐるのか？

戀ひ焦れたる者の待遠さが、  
如何に苛立たせ毒々しくするかな！  
かくむしむしとした夜には  
毒菌が園に生えて来る。

戀は七の惡の如く  
私の命を食ひ滅す。

私は殆んど何物をも口にし得ない。  
いざさらば、汝玉葱の御馳走よ！

月ははや海に沈み行き、  
星はすべて皆倦み疲れ、

灰色の朝が生れて来る——  
私ほ悦んで死ぬるのだ。

『この適歸するところを知らぬ魂』

この適歸するところを知らぬ魂を  
私は堪へがたく腹立ち憤る。  
その總べての榮譽は苦み惱み、  
その總べての賞讃は情けなさと耻かしさ！

私はその引索を取つて  
それを導かうとせぬ故に、  
その目は望みなき妬みの



毒を含んだ甘さを以て私に挨拶する。

ねがはくはそれが眞心より  
私を呪咀し嘲笑してくれよかし！  
その目のたよりなき探求が、  
永久に私の上に迷うてくれよ。

\*

### 途方に呉れたる痴人

嗚呼！ 私が痴人の心を以て  
痴人の手を以て卓上に壁上に書いたもの、  
それは私の卓と壁とを飾り得たか！

\*

尙ほ且つ汝等は言ふ、『痴人の手は無駄書きする。  
そして卓と壁とは清められねばならぬ

——最終の痕跡すらも消え失せたまで！』

宜しい！ 私は手傳はう。

私は海綿や箒の役を見習つた

——批評家として、水擔ぎの人夫として。

だがその仕事の果てたとき  
私は汝等賢過ぎる者が賢さを以て  
卓や壁をきたなくするのを見たい。

\*

Kimus remedium.

(或は、病詩人に對する慰め。)

汝の口から、

汝涎垂らしの妖女『時間』よ、

あまりにのろのろと時刻が時刻の上に滴たる。

すべての私の嫌厭は空しく叫ぶ、

『呪ひよ——永久にまで

永久の深潭にまで呪ひよあれ！』

世界は黄銅で出来てゐる。

貴んだるその牡牛には、如何なる悲鳴も聞えない。

痛みは翼ある短劍を以て

私の骨に書きしるす、

『世界には如何なる心胸もなし。』

又此故に世界を憤るは愚かなり』と。

ありとあらゆる罌粟を注げ、

熱病よ！ 毒藥を私の頭腦に注げ！

あまりに久しく汝は私の手と額とを吟味してゐる。

何を汝はたづねるか？ 何を？ 如何なる報酬をあてに？

汝賤婦にまで、

賤婦の輕蔑にまで呪ひよ！

否！ もとへ！

外は冷し、雨の音を聞く——

私は汝によりやさしくすべきであつたか？

取れ——此金を！ この金貨の如何に輝くかな！  
汝を『幸福』と呼び、熱病よ、  
汝を祝福すべきであらうか？

戸は開く！

雨は私の床に散り注ぐ！

風は光を消し——哀みはいやまさる！

今一百の韻語を有たなかつた者は

——私は請合つて言ふ——

それは必ず破滅する！

\*

### 『私の幸福！』

サン・マルコオの鳥を私は再び見る。

その廣場は靜かに、午前がその上に安息してゐる。

柔かな涼しさの中に私は閑な歌を、

鳩の群れ飛ぶ如く青天へ送り上す。

そして又誘ひ返す——

更に一の韻語をその翼に結びつけてやる爲め。

私の幸福よ！ 私の幸福よ！

汝藍青の、絹張りの、靜かなる天蓋よ、

如何に汝が多彩の建造物を蔽ひ包みつつ揺れ動くかな！

それを私は（何とか言はむ）愛し、恐れ、嫉妬する……………

その魂を實に私は飲みたいとねがふ！

それを私が返すべきか？

否、汝眼の驚異の收場よ、それを口にすな！

私の幸福よ！ 私の幸福よ！

汝峻巖なる塔よ、如何なる獅子の跳躍を以て  
汝が勝ち誇り、疲れを知らず登上するかよ！  
汝は深き響を以て廣場を壓倒する。

佛語では、汝はそれの account again であつたのか？

私が汝の如くあとに止まつたなら、

私は知つた——如何なる絹の網目から……………

私の幸福よ！ 私の幸福よ！

去れ、音楽よ！ 先づ陰影をして

褐色の軟かな夜にまでならしめよ！

汝の鳴りひびくには早すぎる。

圓屋根の金の飾りも照り映えず、

多くの晝がまだ持つてゐる——

詩作や、忍び歩きや、寂しき私語の爲め！

私の幸福よ！ 私の幸福よ！

### 新しき海へ。

あちらへと私は欲ふ。

そして私自らを私の考を信用する。

大海の青々と擴れるところへ、

私は私のゼノアの船を出して行く。

すべての物が新しくより新しく照り輝き、

眞晝が空間と時間との上に眠つてゐる。

ただ巨怪なる汝の目だけが、

無限よ、汝の目だけが私を見てゐる！

シルス・マリイア。

此處に私は坐して、待ち且つ待った——しかしながら何の甲斐もなく、  
善悪を超越して、ある時は光を、

ある時は影を享樂しつつ——一切のもの、

一に遊戯、一に湖水、一に正午、一に目的なき時間であつた。

やがて、友よ！ 一は忽ち二となつた——

そしてツラトウストラは私を行き過ぎた……

ミストラアルの風に。

一の舞踏歌。

ミストラアルの風、汝雲間の獵人よ、

憂愁の殺戮者、天上の掃蕩者よ、

奔騰する者よ、如何に我は汝を愛するかな！

我等二人は一の胎より出でて初生兒、

一の運命に豫定されたる、

永久に亘つて豫定されたるものにはあらずや？

ここに滑かなる岩石の道を

舞踏しつつ我は汝の方へ走る

——汝が笛吹き歌ふとき舞踏しつつ、

その汝は船もなく橈もなしに、

自由の最も自由なる兄弟の如く、  
荒き大海の上を跳び越える。

辛うじて目覺めたる我は汝の叫びを聞き、

岩石の段階へ突き進みき、

大海の黄色なる壁へ。

その時汝は既に清朗なる

金剛石の急潭の如く、

勝ち誇り山より駈け來る。

我は平らなる天上の打場に、

汝の馬の走るを見き。

汝を載せたる車を見き。

汝の手が電光の如く

馬の背に鞭をあてたる時、  
その手の震ひわななくを見き。

汝がより速かに下り立つべく、

車の上に跳び起つを見き。

汝が箭を射る如く

垂直に深淵に飛びこむを見き――

最初の黍明の薔薇色を

金色の光の貫き通す如く。

今すべての山の脊に、

浪の脊に浪の戯の上に舞踏せよ――

新しき舞踏を創作する浪の戯の上に！

我等をして兎色角色に舞踏せしめよ、

我等の藝術をして自由と云はれしめ、  
我等の學問をして悦ばしきものと云はれしめよ！

我等をして各の草木より、

一の花を我等の光榮にまで、

更に二の葉を花環にすべく摘ましめよ！

我等をしてトゥルウバドゥールの如く、

聖徒等と賣笑婦との間に、

神と世間との間に舞踏せしめよ！

風と共に舞踏すること能はざる者、

不具や病弱や老衰の故に、

痿縮し居らざるを得ざる者、

夫の矯飾の痴人や、

村夫子や固陋の道學家に類する者を、  
我等の樂園より放逐し去れ！

街上の埃を、

すべて病める者共の面に吹きつけしめよ、

我等をも病める者の族類を逐はしめよ！

我等をして海濱の全體を、

瘦せたる胸の氣息より、

勇氣なき目より釋放せしめよ！

我等をして天空の溷濁者、

世間の塗抹者、雲霧の招致者を逐はしめ、

天上来を清朗なるものにせしめよ！

我等をして咆哮せしめよ……嗚呼、

すべての自由なる精神の精神よ、  
我が幸福は汝と共に風の如く咆哮す。

さてかくの如き幸福の記憶が、

永久に其遺物を取ることの爲め、

この花環を高く運び去れ！

より高く、より遠くそれを投げ、

天空の階段を上投げて飛ばし、

星辰の座にまで投げ上げしめよ！

大正九年六月五日印刷  
大正九年六月十日發行

定價金貳圓八拾錢

翻譯者

生田長江

發行者

東京市牛込區矢來町三番地中の丸  
佐藤義亮

發行所

東京市牛込區矢來町三番地  
新潮社

◀ 悦ばしき智識 ▶

電話番町（長）八〇九番  
八九九番  
掛替東京一七四二番

印刷所

東京市神田區宮本町五番地  
電話下谷四〇六七番

新潮社印刷部

（印刷者）

高橋治一



譯氏江長田生

全集エチイニ

第一編

人間的な餘りに人間的な

全二冊

(版再)

別に題し「自由思想家の爲めの書冊」と云ふ。人間的なる餘りに人間的なる現實の冷光を以て、理想的なる餘りに理想的なる幻影を照破し、酷烈なる偶像破壊の鐵槌を打ち下したるものはこれ也。余篇を通じて、珠玉の如く、七首の如く、火薬の如きニイチエ獨特の警語と箴言とより成る。而してその箴言と警語との、如何に簡潔にして明快なるかを、如何に尖鋭にして辛辣なるかを、如何に激越にして暴烈なるかを見よ。

第三編

黎

明

全一冊

(刊新)

「人間的な餘りに人間的な」に於て理想的な餘りに理想的なものより解放されたる彼は本書に至つて更に人間的な餘りに人間的なものをも、實證論的の反動の乾燥と低調とをばも超脱し、藝術家ニイチエ自身への健全なる歸還を表明せり。而して前きに冷酷の否定を辿りしものは、その否定の道を行き盡くして、漸く熱烈の肯定に向むとす。これは是れ、大なる否定の後の大なる肯定への一轉機也。壯烈なる新生命の曙光也。

第四編

悦ばしき知識

全一冊

(刊新)

第五編

季節はづれの考察

(近刊)

總洋布最上製極美本、一冊貳圓五拾錢、郵送料十八錢

終